

2024

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2024 年
3 月号
No.729

編集発行 京都府中京区六町 烏丸西人 桑原専慶流家元



いけばな
桑原専慶流

テキスト

2024 年
2 月号
No.728

編集発行 京都府中京区六町 烏丸西人 桑原専慶流家元



いけばな
桑原専慶流

テキスト

2024 年
1 月号
No.727

編集発行 京都府中京区六町 烏丸西人 桑原専慶流家元



いけばな
桑原専慶流

テキスト

2024 年
6 月号
No.732

編集発行 京都府中京区六町 烏丸西人 桑原専慶流家元



いけばな
桑原専慶流

テキスト

2024 年
5 月号
No.731

編集発行 京都府中京区六町 烏丸西人 桑原専慶流家元



いけばな
桑原専慶流

テキスト

2024 年
4 月号
No.730

編集発行 京都府中京区六町 烏丸西人 桑原専慶流家元



いけばな
桑原専慶流

テキスト

2024 年
9 月号
No.735

編集発行 京都府中京区六町 烏丸西人 桑原専慶流家元



いけばな
桑原専慶流

テキスト

2024 年
8 月号
No.734

編集発行 京都府中京区六町 烏丸西人 桑原専慶流家元



いけばな
桑原専慶流

テキスト

2024 年
7 月号
No.733

編集発行 京都府中京区六町 烏丸西人 桑原専慶流家元



いけばな
桑原専慶流

テキスト

2024 年
12 月号
No.738

編集発行 京都府中京区六町 烏丸西人 桑原専慶流家元



いけばな
桑原専慶流

テキスト

2024 年
11 月号
No.737

編集発行 京都府中京区六町 烏丸西人 桑原専慶流家元



いけばな
桑原専慶流

テキスト

2024 年
10 月号
No.736

編集発行 京都府中京区六町 烏丸西人 桑原専慶流家元



いけばな

桑原専慶流

テキスト

2024 年

1 月号

No. 727

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





謹賀新年

皆様のご健康とご多幸をお祈り致します

二〇二四年

令和六年

甲辰（きのえ たつ）

二〇二四年は辰年。干支の「甲辰」にあたる。

「甲」は十干の一番目、生命が誕生した状態。木の兄とは陰陽五行説の「木の陽」のことで、急成長、寛大、屈曲、発展を表す。

「辰」は十二支の五番目。草木の成長が一段落して整った状態。いわば春のイメージ。こちらも「木の陽」にあたる。

「甲」と「辰」は「木の陽」が重なる「比和」の組み合わせで、良くも悪くも最も盛んになる。

言葉の音韻「納音」では、甲辰は「覆燈火」にあたり、自身の周囲を照らす意味を持つ。

あまねく光に照らされ、急速な成長と変化が起きる。春の日差しが成長や変化を助けるように、積み重ねてきた事に光りが当たったり、今まで気づかなかった自分の才能が照らし出される。

私たちがいけた花も、周囲の人に光を届けてくれますように。



稽古の花 ③

△2頁の花▽

11月27日撮影 櫻子

ランキンキュラス（金鳳花科）

レモンリーフ（躑躅科）

磁器ティーポット

新春に春の兆しをいける。カラフルな花をシンブルに。家では器選びも自由に。吸水性スポンジを使うと器も安心で、花も悪くなりにくい。



春をいける

△3頁の花▽

仙溪

青文字（楠科）

チューリップ（百合科）

菜の花（油菜科）

陶コンポート

寒さでこわばった心を春の花が解してくれる。花が伸び、開く姿に励まされる。花が共にあることに感謝。



水仙の生花

仙溪

水仙（彼岸花科）
ひがんばな

煤竹竹筒
すすたけ

昨年2月7日撮影。1月は水仙の花をやや高めにする。いけて2週間後の写真です。

水仙の生花は花、葉の順に袴（株元の白い部分）から抜きとり、いけたい長さに組み直して袴にはめ直す。真のような長い葉を元の袴にはめ直すのは容易ではないので、細めの葉を太い袴に組み直しています。

竹筒でいける時は筒の中に入る長さを考慮しておく。

当流の水仙は自然味を損なわないことを大事にしています。姿良くいけられるようになったら、今度は手を加えずにうに。手にした水仙が作る形を、その都度楽しむような気持ちでいけると、ハツとするような新鮮な表情を見せることができます。

技術を身につけると、植物本来の自然味を大切にすること。そのどちらが欠けてもいい花はいけません。





白花のサザンカ（もしくはカ
 ンツバキ？）の生花だが、細枝
 は折れやすく、かなり無理をし
 ていけている。「内副流し」に
 カッコ良くおさまったが、傷め
 たぶん咲かずに終わった花が
 り、形はそこでも花が最後
 まで咲く扱いをするべきだつた
 と反省。形も花の力も、どちら
 も大事。

山茶花の生花
 山茶花（椿科）
 煤竹竹筒
 仙溪



横から見たところ





新年の稽古の立花

健一郎

竹（稲科） 若松（松科）
 雲竜梅（薔薇科） 檜葉（檜科）
 紅梅（薔薇科） 寒菊（菊科）
 赤芽柳（柳科） 枇杷（薔薇科）
 銅立花瓶

ありがたい事に、月一回の立花の稽古をするようになって1年が経とうとしている。お弟子さん達の上達には驚かされてばかりで、一人一人がそれぞれの道に進んでいる。その月の花を決める時、お花屋さんがいとも勢いのある、ひねた面白い物を準備して待っていて下さる。夏には河骨や蓮、砂物の稽古もできた。毎回花展かと勘違いするくらい贅沢な時間である。

写真は年末の稽古の立花だ。松竹梅で、竹の葉は散りつつあるが、寒菊がよく咲いている。程なくして紅白の梅も咲き、良い年明けを迎えられた。





東北地方の立花

健一郎

蝦夷松（松科）
米栂（松科）
椿2種（椿科）
木瓜（薔薇科）
児手柏（檜科）
晒木

陶花器

椿の自生の北限は青森県まで、蝦夷松の自生の南限は岩手県までらしい。合わせてみるとすぐ場所が絞り込まれた気がする。それより先へ人が持ち込めば花は咲いたとしても、居心地は良くなさそうだ。

冬の蝦夷松、椿、共に大好きな景色である。蝦夷松は大きな枝になると枝が下に向く。椿は葉の上にも下にも多くの蕾を持つ。どちらも雪の重たさに適応してのことだろう。

米栂の枝ぶりが良くて請流枝立にした。蝦夷松の勢いを受け止め、流している。花がより魅力的に見える器を選んだが、新鮮味を感じている。



花伝書を見る

柳除真立花「おもとまえおき万年青前置」

富春軒

枝垂柳 紅梅 白梅 つげ 柘植

万年青 檜 かなめ 要 しだ 羊齒 苔木

(立花時勢粧・下 秘曲の図)

(解説は9頁へ)



富春軒

万年青の前置

△8頁の立花図▽

『立花時勢粧』の「万年青」の項目には次のように書かれている。

「老母草は前置ばかりに用いてほかにつかうことなし」

「花道第一の秘伝の物なり」

「おもとに指し合わせぬ物草木の実のたぐい、広葉のたぐい、著我、水仙、熊笹」

「奇数につかうのは常のこと、偶数につかっても苦しからず」

「葉組しまりたるは幽玄ならず、ゆるやかなる時はくだけて勢いなし。緩からず、急ならず」

他にも、万年青の出生玄妙なところを見せられるようになるには、よほどの熟練が必要だと書いている。

さて、この絵を見ると、枝垂れ柳も柘植も紅梅も、とても動きがあり、斜めに吹き下ろす強い風を感じるが、それとは対照的に万年青はどつしりと構えている感じがする。もともと海岸部の山地に自生し、過酷な環境に適応してきたことを思うと、万年青には何事にも動じない、

母親のような強さがある。老母草の名前も頷ける。赤い実に優しい愛情を感じる。

『立花時勢粧』118作の内3作に万年青が使われている。この枝垂れ柳と紅白の梅の他に、あと2作。そのどちらも「桜一色」だ。

春の兆しを香りで告げてくれる梅。春の息吹を象徴する桜。それらを足元で見守る万年青。そんな自然界のドラマを想像しながら絵図を見ると、流祖・富春軒に少し近づけたような気持ちになる。おそらく流祖自身が木や花の気持ちになつて立花を立て、自ら創つた世界を木や花の心で味わっていたのだろう。まさに仙人の境地といえる。



「桜一色」の万年青の前置

水仙一色の立花

△表紙の花▽ 仙溪

水仙（彼岸花科）

金盞花（菊科）

陶コンポート

以前は葉先まで針金を入れていたが、今はできるだけ短く、もしくは花のみに針金を入れて立てている。無理に作つた感じにならず、長くもつてくれる。

前置のキンセンカは『立花時勢粧』にも使われている。流枝と控枝の後方、腰のところにもキンセンカを加えた。前からは見えないけれど、腰は大切。



こんな感じにいけてね。

中国の挿花③ 仙溪

前号で紹介した絵は明の第5代皇帝、宣徳帝（宣宗）の時に描かれている。宣徳帝は自分でも絵を描くのが好きだったようで、花や鳥、猿、羊、猫などの絵が伝わる。どの絵にも自然の風趣を愛でる繊細な心を感じる。

「壺中富貴図」では吊り下げられた銅壺に牡丹がいけられ、猫が見上げている。中ほどには磁器の三足洗が見える。宮中の点景を描き留めたものだろうか。花と猫、静と動の対比が面白い。宣徳帝は猫が好きだったようで、「花下狸奴図」では太湖石の前に菊と2匹の猫が描かれている。狸奴は猫の異称。

この絵の上部には「神肖烏圓」と書かれてあり、神のような猫、という意味らしい。偶然にも家の猫達と似ている。

「壺中富貴図」の吊り花は牡丹だけでいけられ、前号の春節を祝う10種でいけた重厚な挿花とは対照的で、身近な日常の花という感じである。洗は元々手や顔を洗うためのものなので、皇帝が寝室で牡丹を眺め、香りを楽しむための挿花なのかもしれない。もしそうだとすると、あえて白い牡丹だけをいけているのも頷ける。

宣徳帝の描いた挿花図をもう一点紹介

介しておこう。「嘉禾図」は瑠璃瓶に粟が一本挿されているだけの絵だが、穀物の実りの美しさを絵に描いておきたいという気持ちを強く感じる。四方に垂れる穂と葉の姿。畑にあれば群生の中の一本来にすぎないものを、特別な器に挿すことで感じる神々しさが描かれている。

明代の宮廷における挿花には花材ごとに意味があり、その時その場に相応しい花材を選んでいることが基本理念としてあるようだが、宣徳帝の



④「壺中富貴図」明代 宣宗（宣徳帝）1429年
⑤「花下狸奴図」明代 宣宗（宣徳帝）1426年
⑥⑦⑧：台湾国立故宫博物院所蔵。どれも宣徳帝が描いたもの。
出典：台湾国立故宫博物院アーカイブサイト ④ <https://digitalarchive.npm.gov.tw/Painting/Content?pid=5804&Dept=P> ⑤ <https://digitalarchive.npm.gov.tw/Painting/Content?pid=3220&Dept=P>



⑥「嘉禾図」明代 宣宗（宣徳帝）1427年



出典：<https://digitalarchive.npm.gov.tw/Painting/Content?pid=5805&Dept=P>

物忘れ（道について）

健一郎

「あれなんやつたつけ、あれや、あれ。」ここ最近固有名詞が出てこないことが多い。お水とつてとお願ひしているつもりで本貸して、と言っていたりする。妻にはいつも迷惑をかけているが、その時の状況などから何を言いたいか推測し話を合わせてくれている。言い間違えをするようになって、幾月かたつが、当初は上手に言葉が出てこないことに苛立ちを覚えたが、今は妻の理解もあり穏やかな日常生活を送ることができている。

そんな日常を離れ中国へ。帰国後、以前にも増して言葉のない世界が心地よく感じ、中国の歴史や人、文化に対して興味が湧いて本を読み漁った。その中でも祖父が最も影響を受けたという、『生活の発見』という本をもう一度読み、中国での旅を終えて、現地の友達と話して、感じた価値観と照らしあわせてみると、当時は分からなかったことが次々に腑に落ちた。

そして今まで自分が考えていた事（今までテキストに載せて

いるような事）が莊子、陶淵明の思想と近い気がした。言いすぎていることは百も承知だが、莊子の文章に関しては自分の文章を読んでいるのかと錯覚するほどであった。以前は自分の描く理想に対して必要であると考え、半ば義務的に目を通していたのだが、読むべくして中身を味わえることはなんと幸せなことか。読書とはこうありたい。莊子の文章は友を得た気がし、陶淵明は文字が作る情景に身を浸せた。これからの気の赴くままに本を手にとろうと思っ

て、莊子はよく老子と合わせて、老莊思想とまとめられる。老子は万物は道から生じ、最後は道に帰ると言う思想だが、莊子は天地の巡りのままに、その働きと自分自身を一体化し、自然の「氣」とびったり調和しその世界に悠々と遊ぶ者である。

莊子の中でも有名なものに包丁の話がある。庖丁（ほうてい）という人が一本の牛刀を19年間使い、数千頭も解体しても刃こぼれ一つさせていない。牛は苦痛を感じることなく、死んだことにも気がつかないという。その訳を道を体得したからだとい

うが、その道とは牛の体の天然自然に即して刀を使う技に他ならないという話である。達人の技に見えるそれは、自分の働きかけでなく、他を生かすという行為が根本にあることを伝える教訓の一つである。庖丁さんのちに包丁の語源にもなっている。

流祖が伝書の中で「立花色の事」にて、立花の奥深さを出すための秘伝として例に出している、橐駝伝の話ともよく似ている。

どちらも、真の達人が本人の力のみによつてではなく、相手の生まれもつた生きる働き「道」に即すことで、周りの人から見ると驚くようなことをやってのける類の話である。庖丁さんの話は、その原初ともいえるのかもしれない。そして、分野は違えど達人と言われる人達は似た話をする。

育児休暇を経てグループホームに復帰し、認知症の利用者さんと話していると、忘れる事を認め、堂々と自立して生活する利用者さんは当たり前のようにな格好良い。達人と言われるものをその中に見た。そして、その人はそれをなんとも思っていない。私も、達人を見つける事が

できて、やつとスタートラインに立てた気がする。ここでの生活も僕を構成する大切な、場所だ。点と点が、繋がり短い線がたくさんあったが、それを集めてみると、円のように終わりがなく、全てが関係しあつて成り立つ図形の輪郭がぼんやりと見える。道って面白い。

流祖は、いけばなの世界で「花道」と初めて言葉にしたという意味でも華道史のなかで注目されている。中国の『本草綱目』や、詩を原文のまま引用したり、軒号を富春軒としていることから、中国に対して造詣が深かったことが推測される。日本人が考える道と、中国における道の解釈は違っているのではないかと感じることもある。私は、中国での「道」と言う理解が流祖の残したかった「花道」なのではないかと考えている。

そして中国でも「道」という言葉は複数の意味を持つ。老子と莊子でも道の解釈は違っている。江戸や今の日本では、孔子のとなえる儒教的な意味あいである「道」という言葉が使われていると感じている。「道徳」の道と同じ意味合いである。

莊子の道とは、一切の分別や判断を捨て去り、身体や五感を

忘れて道と一体となることで、「吾れ我れを喪れた」の境地がそれを表している。

究極にまで五感を研ぎ澄ました先にその世界があると考えている。私は莊子の説く道と似たものを歩こうとしているが、その道は険しそうだ。

陶淵明はその点、家族、自然との調和を求めている気がする。人間本来の生き方を「自然」と言う言葉で表している。

個人的には、莊子ほど極端な思想ではない人間臭さが気に入っている。陶淵明も忘れることに對して重きを置いているように思えてならない。重きを置いているというより、本当にそのものに夢中になつた時にその人は吾を忘れて、そこにいないのかもしれない。言葉で捉えきれないこの世界と向き合っているのだろう。

花に溶けることを目指している僕の気持ちは悪くなかつたなと思わさせられる。家族から心配される物忘れも順調？に進行している。蛇足だが、ここ数日で母親の物忘れ、妻の物忘れも進行している。影響されているのかお互いになのか。聞いたことのない話だけに今後が楽しみである。



春を告げる花

桜子

ユーカリ・ニコリー（フトモモ科）
エビデンドラム（蘭科）
ストック（油菜科）

陶鉢

真冬の冷たさの中、良い香りがすると一瞬春の気配を感じる。ストックの甘い香りとユーカリ・ニコリーの清らかなミントのような香りが混ざり合って、季節の先取りをしたような感覚になり不思議。

ピンク、淡い黄色、鮮やかな緑の組み合わせは春らしくて部屋を優しく温かな雰囲気に変えてくれる。年ごとに春が短くなりつつあり恐れているが、香りや彩りを工夫して季節を感じる花をいけていきたいと思う。



いけばな

桑原専慶流

テキスト

2024 年

2 月号

No. 728

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





カトレアをいける

仙溪

五葉松ごようまつ（松科）

カトレア（蘭科）

オンシジウム（蘭科）

コルデイリネりゅうぜつらん（竜舌蘭科）

金属花器

カトレアの原種は中南米の高地で樹上に根をはり、根で空気中の湿気を吸収して育つ。名前は2百年前に英国人カトレイがブラジルから英国へもたらしたことに因み、その後多くの品種がつくられた。蘭の女王と呼ぶに相応しい花だ。

カトレアは高山の樹木と相性が良いように思う。厳しい環境で育った物同士の品格がつり合うのだろう。ゴヨウマツととり合わせ、コルデイリネをカトレアの葉の代わりに。小花のオンシジウムが優しく絡まる。

カトレアは茎が短いのでカトレアホルダーでいける。コルデイリネの葉を1枚切って、ホルダーを隠している。





温
も
り
の
色

仙
溪

雪柳（薔薇科）
喇叭水仙（彼岸花科）
金盞花（菊科）

陶
花
器

ユキヤナギの白い花に、黄色
とオレンジ色の花を合わせて春
を感じる盛花に。
ラッパズイセンの葉だけでは
淋しいので、キンセンカの豊か
な葉の繁みが一層有難い。まだまだ
寒さ厳しい日もあり、温かな花
色で長く元気でいてくれること
に励まされている。





稽古の花 ④

1月9日撮影 仙溪

啓翁桜 (薔薇科)

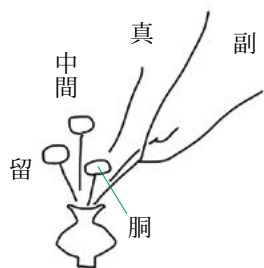
スプレー菊2種 (菊科)

陶花器

ケイオウザクラは1本を切り分けています。スプレーギクは小ぶりでサクラに優しく寄り添ってくれました。葉付きが少なめでしたが、3本で十分な繁みになりました。

撮影後2週間になりますが、サクラが開花し、キクたちもまだまだ元気で、目を楽しませてくれます。

(花代 1,300円)





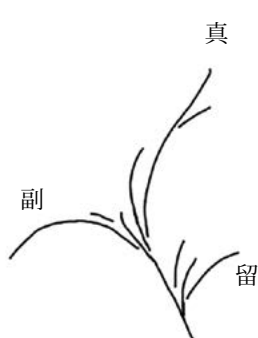
猫柳の生花

仙溪

猫柳（柳科）
ねこやなぎ

竹筒

花穂の美しい猫柳。動きのある草の花型のうち、副を長く伸ばした「副流し」に似ていた。数日後の写真なので、花穂が立ってきて可愛いらしい。



12ページの立花を、いけこみ前日に家で立て終えたところにメイちゃん登場。絶妙な位置でポーズをきめてくれました。





冬の香り

健一郎

黒文字（楠科）
くろもじ くのき
 ト半椿（椿科）
ぼくはんつばき
 水仙（彼岸花科）
ひがくはん
 飴色釉陶花器

稽古でも好んで生ける取り合
 わせである。今年は水仙の本数
 を増やしてもらい、椿と水仙の
 2種で稽古した。今ぐらいの季
 節になると良い香りのお花が多
 く出回る。花の香りでは、水仙
 やフリージア、茎の香りでは、
 黒文字や、青文字、梅の、切つ
 た後の枝の匂いが気に入っており、
 伝えていけると教室のみんな
 が香りを楽しんでくれている。
 今年、黒文字をいけた人から、
 名前が思い出せませんでした
 が、切った時の香りで名前を思
 い出しました。と話があつて、
 花を五感を使って心から楽しん
 でくれている姿に嬉しくなっ
 た。





主観と客観

健一郎

鶯神楽（忍冬科）
うぐいすがくら すいかすら

紅梅（薔薇科）
こうばい

ヒマラヤ杉（松科）

陶花器

少し早くに咲いたウグイスカグラを梅と合わせてみた。春を思ふ冬の花になった。二枝とも葉のない枝にお花のみが咲いている。このように冬らしい姿の枝を、一緒に生ける事は普段は考えつかないが、2つの枝の反応をどうしてもみたくなった。柔らかくて柔軟性のあるウグイスカグラと強く上に伸びようとする梅。全く違うように見えていても、いざ写真になるといまいひとつ、違いが分かりにくい。主観と客観のバランスが大切だと感じた。思っている良さを伝えるのはやはり難しいものである。植物園でいつもみていたヒマラヤスギを生けることが出来るとは夢にも思っていなかった。毎度、お花屋さんのお花を集める力に驚かさぜられる。ヒマラヤスギが二枝の個性を尊重しながらも自らも強い主張をしている。他を生かしながら自分も生き生きとしている姿は格好いい。

同砂之物

花伝書を見る

松一色 砂の物

(富春軒・初版)

松 晒木 苔木

(立花時勢粧・下 秘曲の図)

『立花秘傳抄』(立華時勢粧4巻・8巻)には、松一色について次のように書かれている。

「松の一色は祝言第一の花であり、また一色の一つである。移徙(うつり)（貴人の引越し）の時には必ずこの花を指す。近頃初心の人にも相伝して、むやみやたらにこれを指すが、恐ろしいことだ。たとえ少々伝授したとしても、長年の巧者でなければ松の景氣の妙なる所(なんともいえない美しさ)を瓶上(いしやう)にうつす(移す、映す)ことは難しい。たと

えば筆道(ひつどう)をよく相伝したとしても、修行に磨きをかけなければ文字の形は良くならないのと同じである。」

「松の一色は四季それぞれに立てると言うが、菊がようやく終わる頃から紅梅がやや咲く頃までこそ、松の一色が一番面白い時季である。へ神無月時雨にそめぬ松」とは言うけれど、その一方で葉も黄ばみ霜にいたみ雪にうづもれて、色の変わった葉が出るのは、山も頭になり峰もさびしくなる頃のことだ。それなのに、この頃の人は春の末から秋のなかばまで変わらぬ色の松ばかりを瓶に集めて一色とする。そのどこに面白みがあるのだろう。松は彩りが第一で難しいものだと言人も伝えている。」

「松に苔、晒木を付ける時は、体用よく和合して一木の気色(様子、表情、風情、趣)をうつすべきで、このことは立花の最も大切なことである。晒木は高山の物だから、松の気色も年月を経て枝が垂れ、陰高き心を指すべきである。若松、みどり松には加減が必要。」

長い文章の引用となったが、要するに、立花においては

自然の風趣をうつす

ことこそ大切なのだと言っている。おそらく富春軒自身が奥山に分け入り、松のなんともいえない美しさに魅了された経験を経験を元にしての言葉だろう。

長い年月を経た松が、月明かりに陰高くそびえている。その姿のなんと神々しいこと。目をこらすと霜枯れた葉色や、白く光る晒木も混じる。その荘厳な美しさを瓶上にうつしたいと願う、強い思いが感じられる。

さて、この松一色・二株砂の物だが、「陰高き松」が見せる様々な要素を、目の前に低くギュッと凝縮させた感じがする。このような景色は実際には無いだろう。富春軒の心の中で創られた空想の世界、仙境の風景とでも呼べばいいだろうか。独自の境地を感じずには居られない。

自然の「妙なる所」を自分なりに表現することを教えてくれている。

体用＝本体とそのはたらき。主体とその作用・属性。基本的な芸とそこから生まれる趣。





桑原仙溪 南天 松 杜松 梅 水仙 椿
小菊 枇杷



上野淳泉 松 蘭2種 伽羅木 柂木 千両 小菊



桑原健一郎 松 梅 伊吹 椿 菊 小菊
春蘭の実 苔木

第7回流枝会立花研究発表会

立花研究会「流枝会」は13世家元の強い思いを受けて、当流華老の上野淳泉先生が長年指導してこられた。私も若い頃約10年通って教えを受けたが、今回恩師の立花と並んで出品できた喜びと共に、まだまだ花の道半ばであることを再認識させていただいた。

イタリアン・ポピー

△表紙の花▽ 櫻子

イタリアン・ポピー（芥子科）
姫南天（目木科）

陶水盤

初めましての大きなポピー。福岡県の花弁生産者クレインワールドさんが2020年にイタリアで出会い、3年後日本での栽培を可能にした品種だとか。ヒメナンテンで優しく緑を加え、イタリアン・レッドの器にいった。花から力をもらえそう。



殻は下から
剥く





斜め前から見たところ

ジャパンスピリッツ in 京都
南天の立花 仙溪

会期 12月30日(土)～1月5日(金)

会場 JR京都駅ビル2F

南天(目木科) 白梅(薔薇科)

松(松科) 伊吹(檜科)

白玉椿(椿科) 水仙(彼岸花科)

譲葉(譲葉科) 小菊3種(菊科)

蝶耳銅立花瓶

JR京都駅ビル内の広場で、器に込藁を入れるところからいけあがりまでを約20分でご覧いただきました。

新春を寿ぐ気持ちを込めて立てた立花で、常緑のマツのほか、難を転ずるナンテンを主材にして、次の代へ繋ぐユズリハも加えています。

会期中、元日に能登で大地震がありました。厳しい寒さの中で不安な日々を過ごされていることを思うと胸が痛みます。適切な支援が行き届きますように。

いけばな

桑原専慶流

テキスト

2024 年

3 月号

No. 729

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





生命の不思議

ツチグリ

仙溪

生まれて初めてツチグリを見た。不思議な形をしている。正体は菌類のキノコだそう。もとは団子状で土の上に発生し、雨で湿ると外皮が割れて反りかえり、タコのような形になる。おそらくその時土から分離するのだろう。見つけた時には完全に土から離れて存在していた。今にも歩き出しそう。

袋状の頭の頂点に穴が空いていて、雨が当たると中から胞子が飛び出すようになっていて。京都北部、雲ヶ畑での自然観察会で体験できた。参加するたびに、多様な植物が残る自然の大切さを教えてもらっている。



よく見ないと落ち葉に隠れて気づかない。黒いのは鹿の糞。

アオモジの花

仙溪

青文字（くすのき）
チューリップ4種（百合科）

陶花瓶

アオモジは冬のうちに小さな丸い蕾の状態でいけることが多く、春近くなり蕾が膨らんでくると、いけて暫くのうちに花がどんどん咲いてくる。淡い黄色の優しい花の集まりが、枝に添ってあちこちに広がる姿を見ていると心が弾む。

投入では多少枝が横をむいてもかまわない。自然にとまる姿を生かして、広がりや膨らみを感じるいけ方が似合う。

口の狭い花瓶にチューリップと2種でいけた。チューリップも居心地よさそうな場所に自然体でいけて、アオモジとの競演を楽しもう。



クリスマスローズ

櫻子

スカビオサ（松虫草科）
まつひしろう

オバタス（稲科）

クリスマスローズ（金鳳花科）
きんぽうげ

ガラス花瓶（鈴木玄太作）

クリスマススの頃に咲く「ヘレボ
ルス・ニゲル」をクリスマススロ
ーズと呼んでいたのが、日本ではヘ
レボルス属全体をクリスマススロ
ーズと呼ぶようになった。その多く
は2月頃から咲き始める。つぼみ
は苞葉に包まれていないので、白
やピンクの色が感じられて可愛ら
しい。一重咲きや八重咲きの花が
うつむきながら咲くのが可憐で、
大好きな花。

以前庭で咲いていたのにいつの
間にか消えてしまった。

一緒に取り合わせたスカビオー
サやオバタスも早春の光の温もり
を感じて咲いてくれたよう。

クリスマスローズはそんな雰囲気
を与えてくれる。





ケイオウザクラの立花

仙溪

- 啓翁桜 (薔薇科)
- 躑躅 (躑躅科)
- 貝塚伊吹 (檜科)
- 木苺 (薔薇科)
- 菜の花 (油菜科)

陶花瓶

2年前の流展では、大きな桜の老木で「桜一色の立花」を立てる事ができたが、あんな経験は夢のような出来事で、一生に一度あるかないかの事だ。日常の中で「桜一色」を立てるのは難しいが、桜を主にした立花が立てられないかと、ケイオウザクラを主材に山里の風景をイメージして立ててみた。

ケイオウザクラには葉が無いので、常緑のイブキとキイチゴの若葉、ナノハナをとり合わせた。控えめに加えたツツジの色で春の優しい彩りを感じる。





ヨウコウザクラの生花

仙溪

陽光桜（薔薇科）
銅薄端

大きな床の間に花を所望されていけたサクラの生花。役目を終えて持ち帰り玄関に飾って2週間、今も綺麗に咲いている。本来はもっと濃い花色のサクラで、ソメイヨシノより一足早く咲くので街中にあるとよく目立つ。このサクラも実際には写真で見るとより濃い色で、そろそろ葉がひろがってきた。このあと花が萎れたら摘み取って、若葉の生花としてももう暫く楽しむと思う。



④ いけてすぐの写真。

⑥ 10日後の写真。「家でお花見たにゃ」

雪柳の生花

健一郎

雪柳（薔薇科）

陶花器

雪柳の生花を生ける時は株分で生けることが多いが、今回は勢いに任せ、一種で生けた。それほど撓めることができないため、留は全て横枝を選んでいゝる。拵えた横枝でなく、自然の横枝の自由な動きは心が弾む。雪柳を綺麗に見せるべく、竹筒でなく水盤を選んだ。水を一杯にはって水際を目立たせると、水際が生花を綺麗に見せる。一種なので少し面白い水盤を選んだ。反対色の黄色のバック紙が強すぎたかと考えている。色による写りの変化は考えていて飽きない。





自然の妙味

健一郎

椿7種（椿科）

雪柳（薔薇科）

花崗岩花器

今年も椿の綺麗な季節がやってきた。一昨年のテキストでは椿6種類のみで生けた好きなお花がある。それは椿から感じた一つの面であることは間違いないが、その時に今回のように生ける構想も同時に持った。椿の枝ぶり、椿の葉の色の違い等。7種類の椿のみでもよかったのだが、葉をよく見せようとする、少し重たく見えてしまう。全て意図通りではなく、お花に委ねながら、意図の通っていないところに自然の妙味を感じて楽しんでいる。



同

花伝書を見る

松除真立花

「除真の内草の花形」

富春軒

松 梅 晒木 苔木

水仙 椿 柘植 伊吹

枇杷 若葉

(立花時勢粧・上)

解説は9ページ



富春軒

除真の内 草の花形

「除真の内、草の花形」こそ立花の骨髓であると富春軒は書いている。

それがどのようなものかを、「立花時勢粧上巻」に11作の立花図で示してくれている。右の絵はそのうちの一つだ。そして次のように書いている。

「草木自然の形をそのままに」

「あまり細工に頼らず」

「長短高下の定法を離れて六つの枝（真・見・越・副・請・控・流・枝）が、有ると思えば無く、無いかと思えば忽然と有って」

「意気あり発生あり艶あり色あるを、草の花形という」

「名人の花というのは、十回、二十回、立花を立てたとしても、その都度珍しい一手が必ずあるものだ」

「名人の教えを受け、道を極めなければ、この妙を得ることは難しい」

さて、この「妙を得る」とは何をさすのだろうか。辞書で調べると「妙」とは、

言うに言われぬほど優れているさま。

不思議なまでに優れているさま。

人知をこえて靈妙であるさま。

（「さま」を「こと」に換えてもよい）

という意味がある。また「靈妙」とは、

神秘的な尊さをそなえていること。

を言う。

富春軒は

「自然の神秘的な尊さ」

を感じる立花を目指していた。

それは、

「意気あり発生あり艶あり色ある」

そんな立花でありながら、珍しい一手がある、というものだ。

そのことを踏まえてこの絵を見てみよう。不思議な曲がり

方をした松が左下へ伸びているが、それ以外は「草木自然をそのまま」立てた感じがする。

この曲がった松は途中で細

工がしてあるかもしれないが、枝先の急角度に曲がった姿は元の形だと思う。過去に自分でもこんな松をいけたことがある。

自然の様々な枝葉の組み合わせや差し出し方を工夫して、意気、発生、艶、色を感じる立花を立てている。そして最小限の細工による珍しい一手を加えて、自然の神秘的な尊さを表現している。

富春軒は次のようにも言ってくれている。

「近頃の人、この花形をものにしたいと願っても、従来の手癖が抜けず、あるいは基本花形に縛られて、いつも同じ花形になってしまう。

例えば鋳型で瓶を鋳る時に、出来不出来はあっても、形は変わらないのと似ている」

「道」には真行草があり、真から行、行から草へと進むことが「靈妙」を得る手がかりとなるのだろう。

言うは易し行うは難しだが、高みを目指す気持ちは持つていたい。

モモとナノハナ

△表紙の花▽ 仙溪

桃「照手桃」（薔薇科）
菜の花（油菜科）

陶水盤

切り花として売られているモモは、たいがい真っ直ぐな太い枝とその分かれ枝が束になって

いる。そんなモモの場合は太い幹が目立たないようにして、おもに細枝を使ってやや小型の生花にすると、花の優しさが表現できる。

今回いけた照手桃という品種はいつもと趣が違い、曲がった

幹から短い別れ枝が出ていたの
で、やや大型の生花にしてその
姿を生かした。

あまり基本形にこだわらない
ようにして、全体のバランスを
大切にしている。モモだけでは
形が単調なので、ナノハナと
株分けでいけてみたが、広がり
と躍動感、色彩効果、緑の瑞々
しさが加わった。



中国の挿花④

仙溪

前回、明の宣徳帝が自らいけたかもしれない挿花の絵を紹介したが、宮中においては暮らしの中で花をいけていたこと、それを皇帝自ら絵に描いていたことを知った。15世紀初頭の中国には、すでに挿花が主題となった絵画が存在していた。

翻って日本ではどうだろう。器に花を挿して観賞することはすでに平安時代の貴族社会で行われていた。清少納言が『枕草子』の中で「いとおかし」と、書き留めてくれている。しかし中

国の挿花図のように挿花のみを生き生きと描いた絵がはたして存在したのだろうか。

日本と中国を絵画の視点で比較してみるかぎり、中国では花を挿すという行為がかなり古くからとても大切にされていたのだと感ずる。美しい絵画で後世に残そうとまですた「挿花」に、どんな思いが込められ、どのような時代背景があったのだろうか。

明の一つ前、元の時代（1271～1368）にも美しい挿花図を見つけたので紹介したい。この絵も台湾・故宮

博物院がデジタルで公開している所蔵品の一つだ。

「太平春色」と名付けられた軸には首の長い白磁の花器に6本（5種？）の牡丹がいけられている。純白の器は表面に模様が彫り込まれていて清雅な品格を感じる。どの花にも命の輝きが感じられ、後ろ向きの黒い牡丹が絵に深みを与えている。おのおの個性が光る女性たちの群舞を見ているようだ。

この絵は元の末期、1361年に張中という人が描いたもので、約450

年後、上方に文字が書き加えられた。

張中を調べてみたところ、字は子政、生没年不詳、江蘇松江（現在の上海）の人で、山水画を黄公望に師事したとくらしいから分らない。

師の黄公望（1269～1354）は水墨画の傑作「富春山居図」を描いた文人画家なので、張中も文人と推測される。

高い教養と志をもち、風雅を愛する文人にとって、花を器に挿すこと、それを絵に描くことは、すなわち自己世界の表現だったのだろう。明の宣徳帝の絵にも同じものを感じる。



「太平春色」元代 張中 1361年
台湾国立故宮博物院所蔵。

出典：台湾国立故宮博物院アーカイブサイト
<https://digitalarchive.npm.gov.tw/Painting/Content?pid=729&Dept=P>

この挿花図は風景の一部としてではなく、挿花だけを描いている。前回紹介した「歳朝図」も同じ描き方だったが、おそらくこの絵を掛けることで、あたかもそこに花がいけられているように感じるだろう。実際にいけた花と器から生まれる感覚を、そのまま絵に描きたい。後の人にもその雰囲気を与えたい。そんな思いを感じる描き方だ。花の上方に「座右得清陪」と書き加えた人は、この絵を自由で清らかな精神の拠り所にしていただろう。

雪柳の立花

健一郎

雪柳（薔薇科）
 椿2種（椿科）
 辛夷（木蓮科）
 菜の花（油菜科）
 陶花器

お花屋さんから聞いた話だが、京都のある特定の露路栽培生産者の花がとにかく勢いがある。ものが良いので、これは○
 ○さんですかと尋ねると間違いないくその人の花なのだそう



だ。今回その人の雪柳をタイミ
 ングよく仕入れてくれていたの
 で、迷いなく雪柳で立花の稽古
 をすることにした。里の植物が
 よく似合う。

【記録】

第60回 岡山県華道展

会期 2月7日(水)～14日(水)
 会場 天満屋岡山店
 (写真①)

第5回 野外いけばな展

私の印象（京都）

会期 2月9日(金)～12日(月)例
 会場 堂本印象美術館庭園
 出品 桑原健一郎
 (写真②)



野外いけばな展「私の印象」 堂本印象美術館庭園
 桑原健一郎
 花材：連翹、ヒマラヤ杉。
 花器：球形陶花器（竹内眞三郎作）。



岡山県華道展。通期の合作席。



稽古の花 ⑤

2月6日撮影

櫻子

小手毬こでまり(薔薇科)

ガーベラ(菊科)

レザーファン

(オシダ科)

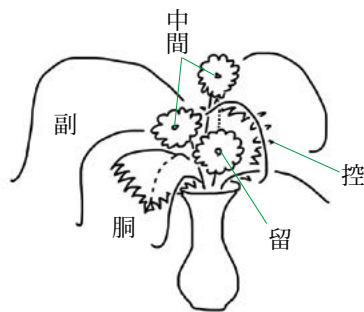
陶花瓶

コデマリ1本、ガーベラ3本、レザーファン2本の投入。

コデマリの枝が作る丸みのある空間は、他の花材では作れない独特のものです。

コデマリは枝の仕掛け(丁字配りなど)を工夫して良い表情の向きに留めましょう。

他の花材や器とのバランスをよく考えて、自然な姿を生かしつつ、ときには切り分けた分かれ枝の足元を繞ためて(曲げて)挿し加えたりもしながらいけます。なかなか難しいものですが、良い稽古になります。



地域や店舗によって花の値段は異なります。花代の設定も様々ですが、ここでは1300円(税抜き)で買った花材でいけています。稽古のとり合わせの参考にしてください。

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2024 年
4 月号
No. 730

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





耳飾りのような花

仙溪

4ページのトサミズキはいけて3週間経ち、こんな状態に花が咲いてくれた。なんとも可愛く健気だ。



いけばなはいけた後も変化してゆく。傷んだ葉や花を摘み取ったりはするが、一旦手を離れた花たちが器の上で思い思いに咲いたり伸びたりするのを見ていると、いけばなというものは人と花とが一緒につくるものなんだなとつくづく思う。そしていけた瞬間ではなく、そのあと長い時間と共にいけばなはその力を発揮するものなのだ。少しでも長く元気でいてくれるような扱いをするのが、いける側の基本だと思う。

ブラック&ピンク

櫻子

黒花 蟬梅 (蟬梅科)
芍薬 (牡丹科)

陶鉢 (アメリカ)

ピンクのシャクヤクを濃淡でいけると、優しい季節の香りと共に心が華やいでくる。子供の頃からピンク色が好きだったけれど、今は他の色と合わせた時の変化も楽しんでいる。

クロバナロウバイは北アメリカ原産の落葉低木。ロウバイ程ではないが花、葉、木がほのかに甘く香る。静かな風情が好まれて茶花にもよくいけられる。今回は良い枝振だったので長く横へ伸ばしてシャクヤクと盛花にした。

黒とピンクの対比が気に入っている。





地中海の春

桜子

ミモザ（豆科）

アネモネ（金鳳花科）

金属鉢（トルコ）

ギンヨウアカシアやフサアカシアのことをミモザと呼び親しんでいる。オーストラリア原産だが、南フランスのリゾート地に「ミモザ祭り」があるように、世界各地で春を告げる花として愛されている。イタリアでは世界女性デーの3月8日を「ミモザの日」と呼んで愛する女性にミモザを贈るのだそう。素敵な習慣だと思う。

アネモネも春を告げる花として愛されている。トルコの器にミモザと2種でいけて地中海の春を想像している。

稽古の花 ⑥

3月5日撮影

仙溪

土佐水木とさみづき（満作科まんさく）
アイリスあやめ（菖蒲科）
アスター（菊科）

彩泥陶器（宮下善爾作）

早春の枝物をいけると日に日にひらく花や生長する葉に生命を強く感じて「凄いな」と思います。

トサミズキは数個の花が下向きにぶら下がるように咲きます。淡い黄色の花が耳飾りのように枝から下がる様子は何とも可愛らしい。アイリスは花を包む緑の部分を割いておくと咲きやすくなります。萎れる頃に次の花が出てきていることも。アスターは値段の割に量がありよく日持ちするので、足元が寂しい時に彩いろどりと優しい緑を添えてくれます。

（花代1, 300円）





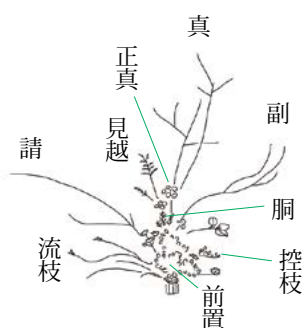
木瓜の立花

仙溪

木瓜 (薔薇科)
 黄金檜葉 (檜科) 椿 (椿科)
 紅柘植 (柘植科) 小菊 (菊科)
 西洋桜草 (桜草科)
 玉羊齒 (蔓羊齒科)

広口陶花瓶

ボケの枝が比較的しつかりしていたので真、副、請に使い、サクラソウとタマシダで春の明るさを加えた。副とのバランスを考えて請の枝は下へ撓めている。サクラソウは鉢から切つて受筒に挿した。





シンビジウムの生花

健一郎

シンビジウム（蘭科）

ガラス花器

頂いたシンビジウムの鉢から花と葉を切ってつけた生花。自分なりにシンビジウムと向き合い、生けた。撮影の前に家元に覚えてもらおうと、花を捌いて俯いていた花の表情を変えてくれた。蘭の花が生き生きとし出す様を見て、生ける、生かすこととはこういうことだと納得。少し小さめのガラスの器だが、大きめのアクリルの敷板でバランスをとった。



蘭の立花

健一郎

シンビジウム、オンシジウム、谷渡り、クロトン、エビデン、ドラム、レリア、デンファレ、



ドラセナ、アレカヤシ、月
桃、芭蕉、アンズリウムの葉。
ガラス花瓶

2年前の堂本印象美術館での
野外花展の際に蘭で立花を立て
たく、お花屋さんに相談すると、
「蘭が風邪引くからやめとき。」
とあり構想は幻になった。確か
に2月の気温は蘭にとっては酷
な話である。一年中出回る蘭だ
が、日本の冬の寒さは熱帯の蘭
にとって致命的なので、必ず温
室が必要となる。春を迎え数多
くの花が出回り始める前に、温
室で生産の最盛期を迎えるそう
だ。今回は3月初旬、蘭の勢い
のある時に、花屋を3軒回り、
アンズリウムとアレカヤシの葉
は黄色くなったものを、蘭もそ
れぞれの店からいいと思ったも
のを選び、生けた。また挑戦し
たく思っている。



花伝書を見る

立花 桜の一世

(富春軒・初版)

桜 枝垂れ桜 伊吹 柘植

苔木 檉 羊歯

(立花時勢粧・下 秘曲の図)

よく見るといろんな桜が使われている。一重咲き、八重咲き、若葉が赤いものと緑のもの、枝垂れ枝。流祖の時代はどんな桜が多かったのだろう。

和歌で「花」といえば桜を指すように、日本人にとって桜は特別な存在だが、その種類は変種を含めると自生種だけで百種以上、さらに園芸種は二百以上もある。

それらの基となる基本野生種(日本の桜の原種)は11種で、

山桜：花と葉が同時に展開する。古くから歌に詠まれ絵に描かれた。

大山桜：寒さに強く、北海道に多い。

霞桜：山桜よりやや小さな花が遅く咲く。

大島桜：伊豆諸島、伊豆半島南部に自生。葉の塩漬けが桜餅に。



江戸彼岸：早咲き、長寿で巨木、名木が多い。シダレザクラはこの系統。

丁字桜：花弁が小さく萼筒が長い。

豆桜：小さな花。富士、伊豆、房総に多い。

高嶺桜：標高の高い所に咲く。

深山桜：白花が複数集まる総状花序。

寒緋桜：沖縄で1月下旬に開花する。花は濃紅色。

熊野桜：2018年に原種の一つに加わった。紀伊半島南部に自生。早咲き。

となっている。これらが自然に交配し、変異し、あるいは人が関わって多くの品種が生まれ、今に至っている。現在では桜といえはソメイヨシノ(染井吉野)を思い浮かべる人が多いけれど、

しざは、いかにも江戸っ子らしい粋な咲きっぷりだが、立花時勢粧の時代にソメイヨシノはまだ世に出てきていない。

ど、この桜は江戸時代終わりから明治時代にかけて、東京駒込染井村の植木屋がつくった園芸種で、奈良・吉野山の山桜に匹敵するような名花になれとの願いを込めて名付けられた桜だ。葉に先立って花が満開になる美

立花時勢粧の桜は野生種の代表ヤマザクラだろう。桜を立てる時は「尊美する心」をもって、花の咲くことの無い草木をあしらっただけに用いるべきと書かれている。そうして立てられたのがこの桜一色だ。

桜への特別な思いがこめられている。

中国の插花^{そうか} ⑤

仙溪

今に伝わる插花図が、中国插花の歴史を知る手がかりになるのでは？。そんな思いで台湾・故宫博物院デジタルアーカイブを彷徨^{さまよ}っている。今回は宋末から元初にかけての文人画家、銭選^{せんせん}の絵を2点紹介する。

銭選（1239～1301諸説あり）は現在の浙江省湖州市の人で、南宋時代に官吏の登用試験に合格したが生涯に渡って仕官はせず、故郷で他の文人達と交流しながら画技を極めた。その画風は北宋時代の宮廷画家による院体画^{いんたいが}

に習い、写実的で緻密^{ちみつ}。銭選の絵は黄公望^{こうぼう}など元末の文人達に影響を与えて文人画隆盛につながった。

「四季平安」①と名付けられた彼の絵には春夏秋冬の様々な花が描かれている。牡丹、椿、白木蓮、蓮、夾竹桃、秋葵、水仙など、現実にはあり得ない組み合わせの花々が一緒に銅器にいけられ、口元に葎^{きりこ}らしきものまで見える。この絵を見てみると、自然の理を超えた不老不死への憧れのようなものを感じる。どの花も不老不死の仙薬になりそうな雰囲気だ。人もしかるべき修行を積めば仙薬によって仙人になれる

ると信じられていた神仙思想が根底にあるのだろう。官に仕えず自由な生き方を選んだ銭選のこの絵は、現実世界の自然や社会的制約を超越した心が生んだ空想の插花図なのだと思う。

中国文化を理解するには、神仙に憧れる心を知っておかねばならないのだろう。花を挿す文化もそのあたりに深く関わっている。

銭選の別の絵②には、ジャズミン？の散華と可憐な野草の插花が描かれている。こちらは実際に書斎に飾って、自然の気を取り込んでいたのだろう。素朴な優しさがにじみ出ている。



「四季平安」宋代 銭選 13世紀後半？

台湾国立故宫博物院所蔵。

①②出典：台湾国立故宫博物院アーカイブサイト <https://digitalarchive.npm.gov.tw>

①春の牡丹、夏の蓮、秋の秋葵（おくら）、冬の水仙などが銅器に挿されている。他にもキノコや変異種らしき花もあり、枝の姿も屈曲し下垂する。妖艶な気配をまとった插花図である。

②日常の点景を描いたものだろうか。角盆に散り敷かれた白い花の甘い香りが漂ってきそう。小さな銅器に春の花が挿されている。花を摘んで挿した人の優しさが滲み出ている。



「花籃図」宋代 銭選 13世紀後半？

文人にとつての插花は、神仙世界に繋がる扉のようなものだったのかも。



アマリリスの生花

仙溪

アマリリス（ひがんばん彼岸花科）

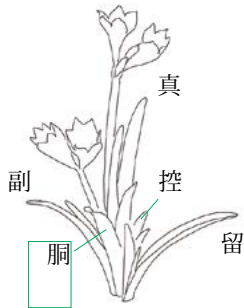
陶水盤（柳原睦夫作）

枚、控に2枚、というふう
に3つの葉株をイメージして
いる。
器の様子が南米原産の花
によく合っていた。

アマリリスの葉は向き合
いながら中から順に伸び
出てくる。葉が4枚出
ると次の年にも花が
咲く目安になるそう
だが、良い葉を多く
生やすには球根の状
態をベストに保たね
ばならない。そんな
貴重な葉を存分に手
に入れたので花2本、
葉11枚で生花をい
けた。

花は葉の隣から伸び
出るのので後方に花を
立ててその前に葉を
さしてゆく。花茎の
中には支柱を立て
ている。

真、副、胴に6枚、留に3



滝本由美子社中展（京都）
絵画と花を楽しむ会





三地域の草花

仙溪

イキシア (あやめ 菖蒲科)

ギリア (はなしのぶ 花忍科)

鳴子百合 (なるこゆり 百合科)

陶花瓶

初めてギリアという花をいけた。頼り無げな茎の先に紫色の小花が丸く集まり、野の花の風情だ。イキシアも華奢な茎と葉に小さな花を咲かせる。ギリアは北アメリカ、イキシアは南アフリカが故郷。どちらの葉も弱々しいのでナルコユリを加えた。ナルコユリは日本原産。3つの異なる自然の組み合わせだが、野にあるイメージが三者を繋いでくれている。欲を言えばもう少しイキシアを多くいけても良かったか。イキシアの花色に合わせて器を選んだ。



太陽があたたかいにゃー。

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2024 年
5 月号
No. 731

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





プロペラのような

△2頁の花▽ 仙溪

棕櫚竹 (椰子科)

紫陽花 (紫陽花科)

セルリア (ヤマモガシ科)

ガラス花瓶

隣家との境にシュロチクを植えてあり、ときどき切っていている。タケでは無くてヤシの仲間。今回もアジサイとセルリアだけでは平凡だと困っていたところを救ってくれた。若い株の梢の部分で、葉がプロペラのように見える。花の重みを軽やかに柔らげてくれた。



ラナンキュラス

・ラックス

△3頁の花▽ 櫻子

ラナンキュラス・ラックス

(金鳳花科)



ビバーナム (忍冬科)
すいかずら

ユーカリ (フトモモ科)

陶製ピッチャー

3週間程前に撮影したラナンキュラス・ラックスを側に飾りながら、この原稿を書いている。今だにパールの様なキラキラした花びらで私を見てくれて、うっとりする。

ラナンキュラスはいつも新しい品種に出会う時、驚きと誘惑でその花の前から立ち去る事が出来なくなるくらい魅力がある。

このラナンキュラス・ラックスも宮崎の園芸家によって作出された品種でどれくらい長い年数をかけて育種されてこられたのだろうと思う。

長くいけても最後まで小さなつぼみも咲いてくれて、その力強さにも感動してしまう。

ラナンキュラス+ワックスIIラックスと言う名前も覚えやすくて、親しみやすい。





2種のツツジで

仙溪

霧島躑躅（躑躅科）
きりしまつづじ

蓮華躑躅（躑躅科）
れんげつづじ

貝母（百合科）
はいも

陶花瓶

3年前、大台ヶ原に行ったのは4月下旬、少し早すぎてお目にかかれなかったが、様々なツツジが咲くらしい。ツツジの多くは岩場や崖地の土壌がやせて酸性の強い、日当たりの良いところを好むそう。そういう場所へ行くにはかなりの登山を覚悟しなければならぬが、それだけの価値はある。

そんな事を思っていたら、2種のツツジと一緒にいけてみたくなった。赤いキリシマツツジは馴染みの花材。レンゲツツジは少し特別。バイモ（別名・アミガサユリ）を合わせて、家に居ながら季節の自然を。





裏白の木 鉄線

仙溪

裏白の木（薔薇科）
鉄線（金鳳花科）

白竹竹筒

ウラジロノキの若葉は緑白色で清々しい。これは葉の両面に白毛が密に生えているためだが、表側の毛はやがて取れてしまい裏側の毛だけ残るので裏白となる。

花展向きの太枝を1本買い求めて生花にいけ、テッセンを覗かせて季節の彩りを加えた。



稽古の花 ⑦ 仙溪

3月26日撮影

薔薇(薔薇科)

茴香(芹科)

玉羊歯(蔓羊歯科)

陶花瓶

良いバラ1本とそれに合う花材の取り合わせです。いけるのが簡単なようで意外と難しく、バラの葉を大切に扱って活かすことが求められます。

花も葉も生き生きとしたバラは、葉に霧を吹き水切りして花瓶に挿すと、それだけでも充分美しいということを、まず実感してもらいたいですね。

ウイキョウはレースのような花が軽やかに広がって、バラを優しく包んでくれます。タマシダの明るい緑色で、爽やかな茂みを加えました。



【訂正】 テキスト730号 5頁
玉羊歯(蔓羊歯科) ↓ 蔓羊歯科

いけ替えて

△表紙の花▽ 櫻子

ヘリコニア2種(芭蕉科)

ギガンチウム(百合科)

不喰芋の葉(里芋科)

陶花瓶(加藤敏雄作)

春にいったヘリコニアは枯れても面白くて不思議なカタチで中々捨てる事が出来ない。

新しいヘリコニアを1本足し、ギガンチウム、斑入りのきれいなサトイモ科の葉をプラスして器も換えていけてみた。



第75回 華道京展 ときめく気持ち 花めく心 ～これからも、ずっと～

会期 4月4日(木)～9日(火)

会場 大丸ミュージアム京都

大丸京都店6階



内田慶雅 も だまづる 藻玉蔓 シンビジウム
コチョウラン ミリオクラダス 器：森野泰明



桑原健一郎 藤の生花 ふじ しやれぼく 藤 晒木 器：宇野仁松



荒田慶優 勝谷慶朋 林慶真 もくれん 木蓮 つばき カラー 椿 器：近藤豊

右同

花伝書を見る

立花 松除真のきしん

「(行の) 行の花の内中流枝立」
ぎよう なかなかしだて

寺田八郎兵衛

松 枇杷びわ 百合あじさい 紫陽花ひょうぎ

栢つげ 要かなめ 小菊 檜扇ひおうぎ (葉)

(立花時勢粧・上)



流麗な枝の動きが印象に残る。左に下がる真の松と右に上る請の枇杷の対比に、左に出た副の枇杷の大きな葉が絶妙なバランスに納まる。流枝が請のすぐ下から出ることで、花形の軽妙さを際立たせている。紫陽花の胴も爽やかだ。

立花時勢粧・上巻には真行草の花形と、それぞれにまた真行草があつてその作例が載る。富春軒が選抜したのであろう秀作が揃っている。

寺田八郎兵衛

中国の挿花 ⑥

仙溪

「天中佳景」と題された絵には、端午節（天中節）に、ゆかりの植物を花瓶にさしたり器に盛って飾る風習が描かれている。いま摘んできたばかりのようなヨモギとシヨウブの葉が置かれ、挿花からは小さなトラやチマキの飾りが吊されている。絵の上部には護符が5枚描かれ（貼られ）ている。

花瓶に挿されている赤い花はザク口。ピンクと白の花はタチアオイか。ガマが1本。盛り物は2種類の粽と団子にザクロ、ライチ（レイシ）、クワ、ヤマモモ等の実。他にもシロクワイ、サクランボも飾られている。

絵の中の植物も飾りも護符も、どれもが悪い物を遠ざけるためのものだ。日本でも5月5日の端午の節句にヨモギとシヨウブを軒に吊したり風呂に入れたりするが、それらには香りで邪気を払い、薬効で身体を強くする願いがこめられている。

中国では端午節に蛇・蜥蜴（又は蜘蛛）・蠍・蜈蚣・蝦蟇の「五毒」とされる害虫が湧き出るので、霊草（葉草）の力でそれらの侵入を防ぐ風習があった。霊草は刻んで袋に入れたり（統命縷）、人型にして門口に掛けられた。ザクロの枝に虎が吊されているのも「端午の虎」が五毒を踏みつけると信じられていたことによる。可愛い飾りにはこどもの健康を願う思いも込められていたに違いない。

中国では端午節に蛇・蜥蜴（又は蜘蛛）・蠍・蜈蚣・蝦蟇の「五毒」とされる害虫が湧き出るので、霊草（葉草）の力でそれらの侵入を防ぐ風習があった。霊草は刻んで袋に入れたり（統命縷）、人型にして門口に掛けられた。ザクロの枝に虎が吊されているのも「端午の虎」が五毒を踏みつけると信じられていたことによる。可愛い飾りにはこどもの健康を願う思いも込められていたに違いない。

護符の4枚は道教の呪符（霊符）で魔除けの意味があるのだらう。中央の鍾馗像は日本でもよく見かけるが、はじめは玄宗皇帝が鍾馗と名乗る者が小鬼を退治する夢を見て熱病

が治ったことによる。以来、絵に描いた鍾馗像は年末の魔除けとなった。いつしか福をもたらす蝙蝠と共に描かれて端午節の護符になったらしい。

中国の挿花は宮廷や寺院、道観料亭、文人の書齋などによって、又時代によって様々なのだらう。牡丹のみに友のように挿したものや、薬を1本花瓶に挿しただけのもの、春節に吉祥の組み合わせを挿したものや、今回のように邪を払う願いを花に託したものもある。絵に残された多様な挿花をたどる旅は、古の中国を知る旅でもある。



「天中佳景」元代 作者不詳
台湾国立故宫博物院所蔵。

出典：台湾国立故宫博物院アーカイブサイト <https://digitalarchive.npm.gov.tw>

魔除けの鍾馗像が年末から端午に変わるの明代中頃だそう。元代に描かれ、明代に護符が貼られたか？。邪を払うとされる石榴、菖蒲、蓬、蒜、龍船花（サンタンカの中国名）は「五瑞花草」と呼ばれた。



繊細に作られた魔除けの飾り。トラ、チマキ、シヨクメイルなどが吊り下がる。



鍾馗とコウモリは魔除けと招福のための図像。



いけばな
ワークショップ



3月中旬、イケバナインターナショナル・ジュネーヴ支部からのお招きで、菜月と小田部慶綾さんと共にスイスを訪れた。

人と植物は北に行けば行くほど大きくなるのではないかと、現地でお世話になった方から伺った。お花が大きく育つという。日本の花は小さくて上品だと羨ましがられたが、花の勢いに差はあまり感じなかった。どちらも土地に合った旬のお花が綺麗だ。ジュネーヴの植物たちの勢いと、日本で普段触れる気候や植物達の差を楽しんだ。例えば、お庭で見つけたアガパンサスは乾燥している地域だからその綺麗な枯れ方で、日本でこんなに綺麗に枯れているアガパンサスをみたことがない。その日には乾燥で唇も切れたがアガパンサスの事を思えば喜んで受け

ジュネーヴの春

健一郎

入れるしかない。気候に合っているのか、日本と比べても特に勢いがあつたのが連翹と木瓜だ。共に庭や生垣によく植えられており、現地では春を知らせる花だという。

驚いたのがお庭で花を見ている際、他のどこでも聞いたことがないほどの鳥の種類と数の鳴き声が日本の夏の蝉といひ勝負をしそうだった事だ。鳥の鳴き声のする庭の中で植物を見ていたり昼食を頂けた時間は、生け花として現れていると思っている。どう過ごすか、どう在るか。何を感じ、どこでどのような影響を受けるかが花や文字に現れる。僕はデモンストレーションまでの少ない時間をできるだけジュネーヴを身体で感じ取ることに注力した。それは飛行機が着陸する前に高度を下げ山の景色が見えてからである。



イケバナインターナショナル 役員の皆さんと



花市場にて



「花ふたり旅」撮影地
シオン城をバックに
島田ご夫妻と



今回、一番自分の中で成長したと感じたのが、人に任せるということだ。人が確かな技術を持っていたとしてもそれは自信のなさ一つで難しいものになる。自分でさえ、感じた事を100%表し切ることは難しい。それは言葉でも、お花であつてもだ。生け花の方が感じた事を表せる時もあるが、言葉の方が表せる時もある。どちらも用いてようやく多少は伝わる事も増えてきた気がする。人に任せる事が増えると、以前まで気になっていた細かいことも少しは気にならなくなった。気になっていたことは自信のなさの現れだったのだと今では思う。下生けが不十分であつてもデモンストレーションで生ける事ができるという、強い自信ができてきたからか、

他人が関わったとしても、自分の理想とかけ離れることはない。もちろん、よく話し、共に花に触れたことのある人しか周りにはいない前提はあるが、人に任せることで、自分1人ではいけきれない程のお花を皆さんにお見せする事ができた。私はデモンストレーションの際、手を動かしながら、お話をして生ける事が好きなのだ。準備の疲労からか、生ける事に一生懸命になり、言葉で花の魅力を伝えきれなかったことが本当に悔やまれる。只、手を動かし生ける喜びがそこにはあつた。それがその時の自分である。菜月の2作を含め10作のいけばなをご覧頂けた。

ジュネーヴで関わった人々への感謝の気持ちと共に次の時代にも伝えたいと思った。ご先祖様からの時間の縦の流れの中にある今の自分と、同じ時間を生きる世界の中の1人という横の繋がりの感覚を同時に持った初めての経験である。



花梨の生花 仙溪

華道京展出品作

花梨（薔薇科）
かりん てうせん

ベル鉄線（金鳳花科）
きんぼうげ

銅薄端
どうはくたん

カリンの花は薄紅色で、春に葉が広がり始めるのと同時に咲く。小さな花なので高い所に咲いていると気づかない。今回初めてカリンをいけたが、想像していたほど枝は硬くなく撓めることができた。ただし若葉と花の力を保つためには、あまり傷めない方が良さそうだ。前期に赤色、後期に青紫色のテッセンを絡ませて緑を補った。



メイちゃん。赤い椿が似合うね。



いけばな
桑原専慶流

テキスト

2024 年
6 月号
No. 732

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





オクロレウカと芍薬
生花 株分け

仙溪

主株

イリス・オクロレウカ

(菖蒲科)

子株

芍薬 (牡丹科)

陶水盤 (近藤豊作)

オクロレウカの葉は長くて肉厚なのでいけやすく、長持ちしてくれる。花の時期は5〜6月。花と葉で生花にいけて、もう一色、別の花と株分けにするのもいい。

カキツバタやハナショウブと同じく、花が萎れてもしばらく後に2番目の花がでてくる。また途中の節にも花が咲くので、残せる蕾は残していけている。そうするとかなり長い間どこかに花が咲いているし、花が無い時でも子株の花が助けてくれる。日々の変化も株分けでいけた後の楽しみだ。





お米の花

櫻子

薔薇^{ばら}5種（薔薇科）

ライスフラワー（菊科）

陶角花瓶（宮下善爾作）

お米粒を小さくしたような花が可憐に咲くライスフラワー。オーストラリア原産なので以前は輸入物でドライフラワーの様な雰囲気だった。今回、初めて国産で作られたライスフラワーの切花がお目見えした。

日当たりや風通しが良く夏も乾燥していないと育たないのにどうやってこんなに瑞々しく爽やかできれいな白い花を育てられるのだろう。

取り合わせたのは農薬に頼らず育てられた初夏の健やかなバラ。こちらでも普段のバラとは違う。最後まで大きく咲いてくれて、散っていく姿も愛おしくて花びらも飾っている。

どちらも愛情と手間をかけて栽培されている花。のびのびと風通しよく気持ち良くなる様にいけてあげたい。



気品

健一郎

ささゆり
笹百合(百合科)
しきんからまつ
紫錦唐松(金鳳花科)

籠花生け

いくつかの稽古で笹百合と季節の葉を添えて、素朴な稽古をしたことがあった。何年か経ったのちも、お弟子さんは、笹百合の事をよく覚えていて、お花の存在感の話になった時に思い起こされるそう。先入観なしに包みを開けてみた笹百合の飾り気のないスツキリとした、気品あふれる姿に、ヒトが心を奪われていく様を見ているのは面白いものだ。だが、感じるその姿を表すのは難しい。いつ表すことができるようになるのだろうか。ゆっくりと向き合っていきたい。

そんな笹百合に合わせたのが、紫錦唐松である。一度は山で出会いたいお花だが、なかなか出会えていない。お花屋さんで出会えて大変嬉しく思っている。ここまでひねたものは探してもないだろう。





灯台躑躅の生花

健一郎

灯台躑躅（満天星 躑躅科）

陶水盤（崔龍熙作）

2ヶ月前の葉が出る前から期待していたドウダンツツジである。葉が出る前は静かな強さを持つていたように見えたが、葉が土から出てきたように思えるほどに青々としている。お花屋さんの紹介で、色々と面白いものを見せてもらっている。本当にありがたい機会だ。

若い緑の葉がよく映るように茶色のバック紙を選んだ。気に入っている合わせ方である。少し伸びた留だが、葉の少ないところだったので、あまり気にならない。自分の中でその都度変化するバランス感覚をその時の植物に合わせて、悩み楽しみながら探している。





阪本慶純 生花 ^{ななかまど}七竈 ^{てっせん}鉄線 器：銅薄端



川瀬慶裕 ^{しらき}白木 ^{てっせん}鉄線 器：陶花器 竹内眞三郎作



上野淳泉 桑原健一郎 長尾慶淑 筒井慶敏 大江慶昌 ^{はなみずき}花水木 ^{どうだんつづじ}灯台躑躅 アルストロメリア
器：陶花器 竹内眞三郎作

第57回 日本いけばな芸術展
心を揺らす花。
会期 4月17日(水)～22日(月)
会場 高島屋大阪店7階
(6、7、8、12頁)



武田慶園 松 ^{しやくなげ}石楠花 白花 ^{しらねあわい}白根葵 器：銅器



第57回 日本いけばな芸術展

桑原櫻子 石井慶月 岡部華秋

オンコクラータ

せんによ まい びろうやし
 仙女の舞 檳榔椰子 エピデンドラム

ミリオクラダス

器：陶花器 竹内眞三郎作

感じる

五感で

考える

どう生かすか

それぞれの調和

花と花 花と器 空間

つくる

花で 花と 花が

先日、指導者むけの稽古の折に、花をいけるプロセスについてホワイトボードに思いついた言葉を右のように書いた。

それぞれについて詳しく説明をしたけれど、要点はこれだけでも伝わるのではないかと思う。

いやもつとこういう事が抜けているとか、自分なりに「花をいける」ことを客観的に捉え直していただきたい。

稽古では「つくる」ことが中心になりがちだが、感じる、考える、つくる。このどれもが大事。

花をいけることは、花でつくることだけど、花と一緒につくる気持ちでいれば、やがて花がつくってくれる。

仙溪

擬宝珠の生花

△表紙の花▽ 仙溪

おぼろげぼし
大葉擬宝珠（百合科）

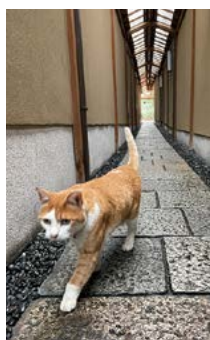
陶花器

何年ぶりかでギボシの生花を
いけた。葉の大小と花がセット
になっている。古典いけばなを
知っている生産者なのだろう。
水際もあまり窮屈に考えず、葉
を傷めないことだけを注意して
剣山でいけた。横から見ると
ぼつてりしているが、正面から
のバランスは良い感じにいけら
れた。真の花はもう少し高くても
よかったか。

擬宝珠の名前は花の蕾が宝珠



に似るためなのだが、見たこと
のある人は少ないだろう。以前
撮った写真に偶然写っていたの
で紹介したい。丸くて可愛い。



家に帰るとレモンが奥の方から
トコトコとやって来ました。
おかえり。めったにここまで
来ないので、外も見ておこう。



同行之花形之内 左流枝

筑摩九郎右衛門

花伝書を見る

立花 松除真

「(行の) 行の花形の内
左流枝」

筑摩九郎右衛門

松 柏 杜若 百合 柘植

要 枇杷 都忘れ

檜扇(葉)

(立花時勢粧・上)

漲る躍動感。この絵図を眺め

ていて、ダンサーが跳躍した瞬間の姿が思い浮かんだ。上体を反らせ、足を前後にピンと伸ば

して大きく前方へ跳んでい

る。立花には整った美しさを

もつものもあれば、バランスを崩した不思議な魅力を放つものもある。後者の美

しさは臨機応変な補助枝の配置によって生まれることをこの絵図は教えてくれる。



中国の挿花^{そうか} ⑦

仙溪

古の絵画に中国挿花を探している
と、花を挿した器を手に持つ人物もよく目にする。

陳洪綬^{ちんこうじゆ}（1598～1652 明代末期の文人画家）の『仙人献寿図』にも挿花を大切に抱え持つ人物が描かれている。中国では長寿の祝いに『麻姑献寿図』を掛ける風習があるそうで、この絵もその一つと思われる。

麻姑^{まこ}とは『神仙伝』に記される仙人で、錦の美しい衣を身につけ、目は輝きを放ち、爪は鳥の爪のように長いとある。天界を統べる女神西王母^{せいおうぼ}の誕生日（3月3日）に、麻姑が美酒を贈ったという伝説から、『麻姑献寿図』は長寿の象徴となった。



『仙人献寿図』明 陳洪綬 台湾国立故宮博物院所蔵



『水榭看鳧』南唐 周文矩 台湾国立故宮博物院所蔵
出典：台湾国立故宮博物院アーカイブサイト

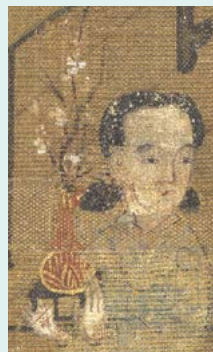
『仙人献寿図』の右の仙女が麻姑だ
ろう。美酒が湧き出る瓢箪^{ひょうたん}を杖にぶら
下げている。靈芝^{れいし}の盃^{さかづき}（？）を持つ手
は鳥のようである。そして左の仙女が
持つ銅器^{どうき}（？）には赤い実が挿されて
いる。これも西王母への献上品ではな
いだろうか。ただし西王母から賜った
仙果^{せんか}（蟠桃^{ばんとう}）とも解釈できる。いずれ
にしても長寿を祝うに相応しい。
ちなみに背中を掻く「孫の手」の元
は「麻姑の手」とする説がある。興味
のある人は検索を。

さて、ぐっと時代を遡って10世紀後
期の宮廷画家、周文矩^{しうぶんきよ}（生没年不詳）
の『水榭看鳧』を見てみよう。水榭^{すいしや}と
は水亭（水辺のあずまや）のこと。鳧^ふ
はカモをさす。水鳥を見ている女主人

の横で侍女が挿花を持ち従っている。
赤い花瓶に挿されているのは桃の白花
だろう。柳の葉が茂る頃なので白梅
ではなさそうだ。湖岸にも同じ木が生
えている。挿花は足付き台に載ってい
るが、水の神様へ花を献じて息災を
祈っているのかもしれない。

以前に紹介した絵にも挿花を捧げ持
つ人物が描かれている。どの絵からも
その対象は違えども花を恭しく献ずる
心を感じる。

花を献ずる姿に、目に見えない大い
なる力に対する畏怖と敬いを感じる。
健康と安寧を願いながら器に花を挿す
様子が目に浮かぶ。植物に対して身体
も心も健やかにしてくれる霊的な力を
感じとっていたのではないだろうか。



右から順に、『八十七神仙卷』 吳道玄 8世紀。『送子天王図』 吳道玄 8世紀。『水榭看鳧』 周文矩 10世紀後半。『五百羅漢図・採蓮』 周季常、林庭珪 12世紀後半。『仙人献寿図』 陳洪綬 17世紀前半。 出典 八十七神仙卷：澄境芸術 <http://www.cjyysw.com/pd.jsp?id=40> 送子天王図：鳳凰新聞 <https://guoxue.ifeng.com/c/88KWa1cVrZk> 五百羅漢図：毎日頭條 <https://kknews.cc/news/o9ok5b6.html>



松除真立花

仙溪

松（松科）

霧島躑躅（躑躅科）

黄金檜葉（檜科）

薔我（葛蒲科）

晒木

銅立花瓶

日本いけばな芸術展出品作

右に上った真が中心線を越えて左側に下がる。バランスを考へて流枝を反対側へ出す「左流枝」にした。ツツジは極力撓めずに分かれ枝をそのまま生かしている。オウゴンヒバの立ち枝を正真にして、シャガの花を加えただけの静かな取り合わせで松の動きに目が行くようにしている。横からもよく見える花席だったが、自然な景色ができていた。

左斜め横から見たところ



いけばな
桑原専慶流

テキスト

2024 年
7 月号
No. 733

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





七夕にいける 仙溪

梶の木(桑科)

河原撫子2色(撫子科)

紫蘭の斑入葉(蘭科)

陶角花瓶(宮下善爾作)

江戸時代初頭、七夕の日には芋の葉の露で墨をすり、梶の葉に歌をしたためて、織姫・彦星の二星に献じたそう。江戸時代中期には寺子屋に通う子どもたちが書の上達を願い、梶の葉と短冊に文字を書いて笹に結んで供えたが、やがて紙の短冊ばかりとなってゆく。

梶はもともと神に捧げる神木で、供え物は梶の葉の上にのせられた。樹皮の繊維は強靱で和紙の原料となり、織姫が織っていたのも梶の繊維だとか。

昨年の七夕の日、庭のカジノキにナデシコとシランの斑入り葉を合わせてつけた。梶の葉は萎れやすいが、七夕の昼に付けて星に願い事をした後、明くる朝まで元気でいてくれた。





雪国の芍薬 しやくやく

櫻子

ニゲラ ニゲラ (金鳳花科) きんぼうがけ

芍薬「みゆきフェニックス」 ぼたん

(牡丹科)

カラー そとこも (里芋科)

陶鉢 (アメリカ)

北信州に「みゆき野」と呼ばれる地域がある。美雪、深雪が由来とされる雪深い土地だが、このシャクヤクはそんな産地で育ってやってきた。良い花をつくるため地域で勉強会を重ねてこられたそうだ。冬の間、雪の下でぐっすり眠ったあとの花。そうとは知らず選んだ花は偶然にも雪のような白い花だった。



ユリとカンパニュラとバイカ
ツツジとメイちゃん。



稽古の花 ⑧ 仙溪

5月28日撮影

木苺（薔薇科）

ガーベラ3色（菊科）

ワイングラス（スウェーデン）

ガーベラ3色とキイチゴのシンプルな投入です。稽古で一つの花瓶にいた花を、自宅では写真のように器2つに分けて飾るのも楽しいですね。

置く場所に合わせて、いけ方、置き方を工夫してみてください。

キイチゴに輪ゴムで十文字に仕掛けをしておくと、ガーベラがいけやすくなります。





縞太蘭 しまふとい

姫萱草 ひめかんぞう

生花

二瓶飾り にへいかざり

仙溪

主瓶 しゅへい

縞太蘭 (蚊帳吊草科) かやつりぐさ

副瓶 そくへい

姫萱草 (野萱草、百合科) のかんぞう ゆり

アクリル水盤

写真のオレンジ色の花はカンゾウとして売られていたが、よじれた葉や花茎の長さ、花の咲き方などがカンゾウと少し違うので調べたところ、ヒメカンゾウのようだ。シマフトイと株分け生花にしようと思ったが、涼しげな器を2つ使い、それぞれにいた生花を並べて飾る事にした。こういうのを「二瓶飾り」と呼んでいる。器は同じでなくもいい。相性の良い大小の器などで、置き方も柔軟に変えながら良い景色をつくる。





石榴の花の投入ざくろ

健一郎

石榴（薔薇科）ざくろ

芭蕉の枯葉、枯花（里芋科）ばしやう

枯れアナナス（パイナップル科）せたいも

陶花器

人と関わりのある植物達を生けた。器は背の高い、人の気配を感じる器に生けることにした。この器からは無邪気で原始的な土を触る事の喜びを感じる。花と作為的な器がぴたりと重なり合いお互いに良さを増幅させ合う様を見ているのはいいものだ。

13世の集めていた器からは無邪気で挑戦的な作家の息を感じる。時間を作っては器を見に各地に行っているが、生産が途絶えたものや、勢いのあるものが少なくなってきたように感じはするが、面白い器や作家さんも見かける。自分が集める器をゆっくりと選んでいる。





夏^{なつ}櫨^{はげ}の立花 健一郎

夏櫨^{なつはげ}(躑躅科)
 大葉馬鈴草^{おおはづまのすくきさ}(馬鈴草科)
 撫子^{なでしこ}(撫子科)
 鳴子百合^{なるこゆり}(百合科)
 下野^{しもつげ}(薔薇科)
 姫百合^{ひめゆり}(百合科)
 桔梗^{ききょう}(桔梗科)
 貝塚伊吹^{かいづかいふき}(檜科)
 檜葉^{ひば}(檜科)

陶花器

ナツハゼに季節の草花をあしらった立花。請はナツハゼに、花フジさんの山のウマノスズクサを絡ませた。それぞれの草花の呼吸に合わせて手を動かしていたつもりだが、しばらく日が経つともう少し花のペースに自分を合わせられたのではないかと思ったりしている。お花のペースとは、その花のらしさや、固有の特徴に気がつき目を向けて触れるという認識でいる。それぞれの花と向き合い丁寧に生けていきたい。



同行之花秋

花伝書を見る

二株砂物 棕欄真

「砂の物の内行の花形」

西村松庵

棕欄 百合 晒木 松

嫩葉 杜若 羊歯 柘植

檜扇 苔木

(立花時勢粧・上)

シュロの幼木を真に立て、シュロの古木の太い幹を株立にした砂の物。シュロは中国から平安時代に九州へ渡ってきた外来種だが、南国の風情が好まれたのと、様々に利用できるもので各地に植えられた。また実を食べた鳥が種を運んで山間に育っているところも多い。

幹を包む繊維層はシュロ皮と呼ばれ、縄や箒、束子になり、太い真つ直ぐな幹は梵鐘を撞くのに使われる鐘つき棒、撞木となる。程良い柔軟性があつて釣鐘を傷めないそうだ。切り出した後の切り株の横で、百合が咲く景色も実際にありそうだ。

「砂の物」は「株立」とも呼ばれ、口の広い鉢に砂を敷き詰めたところに、太く、低く、広く、薄く立てるものをいう。「景気するどに花形勢力風流なる様に立つべき」と書かれている。砂の物には自然の妙味を感じる景色がもとめられる。どんな幹や木をどのように集め、そこにどんな花を品良く添わせるかが見せどころだ。



西村松庵

山の印象をいける

△表紙の花▽ 櫻子

蝮草（里芋科）
 桔梗（桔梗科）
 京鹿の子（薔薇科）
 蛭袋（桔梗科）
 牡丹唐松（金鳳花科）

横長陶水盤

山中で花に出会う楽しみは格別だ。こんなところにこんな花が！と、最初の出会いに感動し、次の年に再会できるとまた嬉しくなる。花には足がないので、人が会いに行かないと会えない



が、そう簡単には行かない。なので切り花で山野草が売られていると連れ帰ってしまふ。この花は6月初旬の切り花たち。心の中の山の風景だ。これからも色々な花に会いに山へ行きたい。



6月6日は、いけばなの日
 いけばなプレゼンテーション2024 ～leaf 葉をいける～

- ⑥ 桑原健一郎 オーガスタの葉 蘭（エンシクリア） 芭蕉の葉 パナナ 器：南瓜形陶鉢（宇野仁松作）
 ⑤ 中辻真紀子 流木 花菖蒲 菖蒲の根と葉 鳴子百合 器：銅砂鉢

中国の挿花^{そうか} ⑧

仙溪

夏むきの挿花図を探して見てつけたハスの絵に、多くの詩が書き加えられている。清の第4代皇帝、康熙帝（1654～1722）の時代に描かれたあと、のちの皇帝や皇族、書家、画家、政治家、計13人が詩を寄せている。

上部にある「珠池寫妙」の文字とその下の詩は第6代皇帝、乾隆帝（1711～1799）によるものだ。
絵の題名「敖漢千葉蓮」の敖漢は北

京の北東あたりを治めていたモンゴルの部族名だ。千葉は千弁という意味だろう。絵のハスはどれも花弁の多い重弁咲きで、一つの茎に二つの花が咲くものも見える。

康熙帝の時代、北京北東部に避暑山庄が建てられ、その御苑池に移植した敖漢千葉蓮をことのほか愛されたそう

だ。
清は満州^{まんしゅう}、漢^{かん}、モンゴル、ウイグル、チベットの五部族を少数派である満州人が統治した。各民族の自治を認め、

争いよりも和を優先した。皇帝が夏を過ごす離宮は、それぞれの長が訪れることで融和を確認する場所でもあった。

ハスは中国語で「荷」とも書き、その発音は「フー」。そして「和」の発音も「フー」だ。様々な土地から贈られたハスが咲き、賓客をもてなす。ハスは他民族の和の象徴だったのだろ

『敖漢千葉蓮』 清 蔣廷錫^{しょうていしやく} 台湾国立故宫博物院所蔵
出典：台湾国立故宫博物院アーカイブサイト

この絵は康熙帝が亡くなる年（1722）の夏に描かれている。康熙帝は中国史上最も偉大な君主の一人。政治的才能と慈悲深い配慮の理念をあわせもち、科学や芸術にも強い関心を持っていた。朝4時に起きて書や絵画の練習をしてから朝廷へ向かったという。



挿花図ではないが、ハスの印象的な絵を見つけた。題名の「琴歌南風」について調べると、「南風之詩」という故事に行き着いた。昔々、舜という帝王（紀元前2千年頃）が五弦の琴を弾いて南風の詩をうたうと世の中が平和になったというお話だ。詩では「南風の香りが民の怒りを和らげる、南風の時に民の財を豊かにせよ」と、民を思う舜帝の姿が詠まれている。

絵ではハスの甘い香りが風に運ばれてくる中で舜帝が琴を弾いている。「南風之詩」の風景にハス選ばれたのは南国のイメージと共に、ハスに象徴された「和」への思いを感じる。ハスの花の姿や香りが人の心を豊かにしてくれる。

この絵は人物事蹟12幀の一つで乾隆帝の時代に描かれた。乾隆帝は古今の書物を編纂しなおす大文化事業を成し遂げている。歴史に目を向け、文化を政治に生かそうとしたのだろう。

もう一つ、夏に涼を感じる絵をご紹介します。明の「山亭納涼図」には山の庵で寛ぐ文人と童僕が描かれている。庭に育つタチアオイを切らんとする童僕の足元には、すでにザク口の花（？）が挿された壺が見える。庭の花を器に挿す風流こそ、文人の理想の世界だったのだろう。



㊤『人物事蹟十二幀・琴歌南風』清 金廷標（?～1767）

㊦『山亭納涼圖』明 周臣（1450～1535）

㊤㊦とも台湾国立故宮博物院所蔵。出典：台湾国立故宮博物院アーカイブサイト

どちらの絵にも、植物の間をぬけて、心地よい風が吹いている。



雪柳 除真立花

仙溪

- 雪柳 (薔薇科)
- 檜扇 (菖蒲科)
- 竜胆2色 (竜胆科)
- 鶏頭 (莧科)
- ヒペリカム (弟切草科)
- 貝塚伊吹 (檜科)
- 小菊 (菊科)
- 陶花器

夏の立花は丈夫な花材を選び、あまり負担をかけずに立てたい。ユキヤナギはペンチで茎を揉みほぐし、針金を添え、茶色フローラルテープで巻いてから慎重に繞めている。花材を傷めない細工を心がけたい。



いけばな

桑原専慶流

テキスト

2024 年

8 月号

No. 734

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





歩いている 健一郎

姫岩菖蒲（百合科）

苔桃（躑躅科）

アルプス竜胆（竜胆科）

石

三角陶花器

所によると山岳地帯を歩けば木がなくなり、岩だらけの山や湿地が現れることがある。この花は、歩いて見た景色でなく、自分がこの景色の中に入っている気がする。現地で、お花を見ていた時も、思い返すと、自分もその中の一部としての感覚や、風も思い出せる。普段から、庭を、裸足で歩き回ったり、靴下をすぐ脱ぐ習慣が関係しているのだろう。特別な時にだけ、感じようとしても、比較の対象がなければ比較する事ができない。日常をどう過ごすかが大切である。この花は石の上を歩いた足の裏の感覚が、特に現れ出ているように思う。





創造の楽しみ

櫻子

クルクマ（生薑科）
デンファレ（蘭科）

石路「福寿牡丹」（菊科）

結晶釉深鉢（前田保則作）

珍しくツワブキの葉が花屋に売られていた。見たことの無いフリル状の葉で長い茎がついている。その不思議な姿を上下に見せて、その間をクルクマとデンファレが立ち昇るようにいけてみた。自分の感覚だけで組み合わせ、偶然生まれる景色を楽しむ。新たな世界を創造するようないけばなだ。

ツワブキの葉には変異種が出やすいらしく、葉が波打つ縮れ葉を獅子芸と呼んで古くから珍重されてきた。福寿牡丹という名前までつけられている。

器の選択も含めて、偶然に創った世界は唯一無二の世界だ。創造することを楽しむのといけばなの魅力だと思う。





紫陽花と合わせて

櫻子

ひめがま
姫蒲（蒲科）

きみぎくし
女郎花（女郎花科）

紫陽花「ディープパープル」

（紫陽花科）

陶花器（市川博一作）

アジサイは酸性土壌で体の中に多量のアルミニウムを溜めても元気に生育することが知られている。アルミニウムは生物にとって有害だが、アルミ毒をうまく体内に取り入れたアジサイは動物にも食べられにくくなり、他の植物が生育しない場所にも広がる事が出来たようだ。江戸時代までは歌に詠まれる事もない目立たない花だったのに今では園芸種となり立派で多彩な花を咲かせている。

色も深みを増してきた。ディープパープルと言う渋いえんじ色のアジサイは枯れていく微妙な色合いがきれいで、人を立ち止まらせる。これも又アジサイの知恵か。

鉾毒を克服し、他の植物を出し抜いて生きるアジサイ。どんな強い相手を取り合わせても似合う気がする。



葉をいける 仙溪

トルコ桔梗2種（竜胆科）

ペゴニア（秋海棠科）

ガラス花器（ヨーラン作）

ペゴニアの葉の美しさは格別だ。多くの種類があり、気に入った品種が売られていると、色々な花との組み合わせを想像して楽しんでいる。

写真のように実際にいけることもあるが、2〜3日すると節のところで折れていたり葉が萎れたり、切り花で長く楽しむのは難しい。

この品種はレックスペゴニアと呼ばれる品種群の一つ。インド、アッサム地方原産のペゴニア・レックスを親に持つ。葉が美しいものが多く、花展でいける場合は土ごと黒いビニールで包んで深鉢に置くようにいけたりしている。

ペゴニアの葉の縁が薄紫色に光っていたので、この取り合わせにした。





月桃の実 げつとう 仙溪

鉄砲百合 (百合科)

月桃の実 (生薑科)

ドラセナ・コルデイレネ

(リュウゼツラン科)

カーネーション (撫子科)

陶花瓶 (伊藤典哲作)

琉球地方に縁のあるゲットウとテッポウユリ。ゲットウの葉を思わせるドラセナを加え、南国の太陽をイメージして濃橙色のカーネーションを覗かせた。白い器はゲットウの花色から。ゲットウの花は先端に赤みを帯びた白い滴のよう。キャンディのような実は橙色に色づく。



ゲットウの花

出典：教育出版 Web ずかん





べつこうまさき
鼈甲柁木の生花 仙溪

鼈甲柁木（錦木科）
にしきぎ

白竹竹筒

4本のベツコウマサキでいけた生花。長い枝分かれのあるものはその分かれ枝を残したまま真に選り、短い分かれ枝のあるものは2つに分けて留と控に使い、残った茂みは留の出口に加えている。

産地や花屋でどんな枝が組まれてくるか、届いてみないと分からないので、手にした枝からどんな生花がつくれるかを考えてからいけ進める。

バランスよくいけることが肝心。



※先月号5ページの生花は姫萱草ではなく唐萱草（とうかんそう）と思われまふ。訂正をお願いします。

同行之花之内 中流枝立

寺田清左衛門

花伝書を見る

立花 かんざうのきしん 萱草除真

「除真行の花の内
中流枝立て」

寺田清左衛門

萱草の花と葉 松 枯梗

檉木 苔木 小菊

紫苑の葉 著我の葉 要

(立花時勢粧・上)

カンゾウが高く伸びて咲く姿
を立花に上手く生かしている。
右下の波打つ葉もカンゾウだろ
う。ただし花に鹿の子模様のあ

る品種は現在見あたらない。交配によつて偶然咲いたものだろうか。希少な花と思つて見てみると、松の枝から鳳凰が飛び立つ姿に見えてきた。カンゾウの花が頭、葉が尾羽で、シオンの葉が翼、キキョウは翻る羽のようだ。

この立花を立てた人は植物を単なる素材としてではなく、それぞれに息づく個性をもった生命体としてとらえている。そういう姿勢に学びたい。



岡山県本部主催

桑原専慶流いけばな展

（花ノ音 花奏ル）

会期 6月22日(土)～23日(日)

会場 倉敷市民会館

出品 89名



仙溪家元が即興で舞台に花をいける間、櫻子副家元がお話で花と音楽の世界へ来場者を誘った。ヒメガマ アジサイ 大水盤3つ 書「音」「奏」 陶製チェロ。

会期中、青年部バリスタカフェでのおもてなし。いけばな体験教室や、家元夫妻による舞台插花ライブなど、和やかな雰囲気、会員が心を込めていた花に多くの来場者が見入っていた。



祇園祭・後祭巡行（7月24日）「浄妙山」のお供で参加しました。

仙溪・健一郎

留学生にいけばな体験

倉敷市と姉妹都市のオーストラリア・サント・ペルテンからの留学生が桑原専慶流の先生指



先生の指導を受ける高校生のエレオノーラさん。「空間の生かし方が難しかった。とても楽しい」

導のもと、新溪園にていけばな体験を行い日本文化に触れた。新型コロナウイルスにより中止が続く4年ぶりの実施となりました。（山陽新聞6月5日で紹介されました。）

水辺の景色

〈表紙の花〉 健一郎

秋海棠（秋海棠科）
尾瀬水菊（菊科）
箱根菊（菊科）

青磁水盤（宮永東山作）

青磁の器に小さく野の花を生けた。敷板がまたそれを小さくみせる。水への意識が強いけばなである。思い返すと各地に訪れては衝動に身を任せ、水に飛び込んだり、飲んだり、少なくとも手に触れることは必ずし



ている。一度も気持ちと言葉にせず、そのままいけばなとして表してみた。贅沢で豊かな時間である。鉢から切り離して水盤に生けてよかったと思えたお花だ。



夏櫨除真立花

仙溪

陶花器

夏櫨 黄金檜葉 檜扇
鶏頭 唐糸草 姫百合
桔梗 撫子 小菊
穂咲下野 鉄砲百合

7月の立花の参考に。枝を少なく草花を多めに立てている。檜扇の正真を高めに立て、その前に数種の花で景色を作った。



仏壇の部屋でくつろぐニャンズ。11ページの『戯猫図』みたいに絵に描いてくれないかによ〜。

古代中国の「尊」

仙溪

「尊」の旧字は尊で、よく熟した酒（酒樽）を両手で捧げる形から生まれた字だそう。

この尊の名前のついた青銅器がある。古代中国で神霊の前に置いて祀る酒器で、口が広く、胴はふくらみ、やや広がる足がつく。この尊に酒を入れて父祖の霊を饗応し、豊作や子孫繁栄の約束をとりつけ、そのあと一族と饗宴をもって結束を強くした。尊という器には相手を尊ぶ心が込められている。

古代インドの壺、ブルナ・カラサは神秘的な生命力の象徴であったが、どこことなく尊に似ているのを不思議に思う。どちらも目に見えない尊い力を尊ぶ気持ちが生んだ形だ。



尊

訓蒙図彙（きんもうずい）より

中国の挿花 ⑨

仙溪

屋外に設けられた祭壇の前で猫達が遊んでいる。黒漆の机には一對の挿花と一對の丸い漆箱が左右対称に置かれ、中央に紫色の尊型瓷器が緑色の盤に置かれている。

何のための祭壇だろう。仕切り幕の両端には鳳凰と竜、吊り飾りの先には人型に見える幡（ばん）が下がっている。邪を払い場を清め、季節の到来を祝い長命を祈るための設えだろうか。

古代中国では青銅の「尊（そん）」は祖先神を祭るときにの酒器だったので、この絵の紫色の器にもお供えのお酒もしくは水が入っているのだろう。

さてその両脇の挿花が気になる。赤い珊瑚が瑠璃色の器に挿されているようだ。器は梅瓶型で、絵をよく見ると後ろの幕の形が透けて見えるので、ガラス製だろう。

仏教の経典には極楽浄土の七種の宝石である七宝（しちほう）のことが書かれていて、珊瑚はその一つである。瓶（びん）も仏教の八つの吉祥模様の一つなので、珊瑚を瓶に挿して仏に供えることが徳の高い行いとなり、やがて仏教に限らず様々な場で珊瑚の挿瓶が供え飾られるようになったようだ。

珊瑚は遠く地中海から中国へ運ばれてくる。西洋では魔除けのお守りで、海が育んだ神秘さが中国人を魅了した。ただし手に入られるのはごく限られた人達だったはずだ。猫が遊ぶ庭の主人はどんな人物だろう。皇帝が描かせたものかもしれない。

ところで、仏教での七つの宝は美しい貴重な宝であるだけではない。七宝の部屋というものがあ、そこで人は金の鎖で繋がれてしまうのだと説く。宝に心を奪われてしまっとはいけないのだ。

この絵の珊瑚からは、人々の幸せを願い、大いなるものに捧げ祈る心を感じる。猫たちのように無邪気で心安まる世の中を願う心でこの珊瑚は挿されているのだと思う。



『戲猫図』 宋（明末？） 台湾国立故宫博物院所蔵 出典：台湾国立故宫博物院アーカイブサイト

桃の葉が茂り牡丹の花が咲く庭で8匹の猫が戯れている。奥の卓上に珊瑚が挿された瑠璃瓶が見える。



株分け生花

仙溪

主株

いぬたで

犬蓼(蓼科)

子株

こかぶ

桔梗(桔梗科)

ガラス鉢

野の花の可憐な姿をイメージして株分け生花をいけた。特に花色の組み合わせにこだわっている。

アカマンマの名前で親しまれているイヌタデもキキョウも、それだけで生花にしたのでは何か淋しく物足りないが、この2種と一緒に株分けでいけることで魅力が倍增する。株分け生花にはそんな力があるので、いろんな組み合わせで楽しんでほしい。

色の効果。形の変化。二株の間合い。水の見せ方。器の力。株分け生花には様々な要素が絡み合って奥が深い。

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2024 年
9 月号
No. 735

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





稲科植物の花穂

△2頁の花▽ 桜子

パンパステラス（稲科）

ローゼル（葵科）

アナベル（紫陽花科）

陶花瓶

各地で稲穂が実り、ススキをはじめ様々な稲科植物の花穂が風に揺れる季節。表紙では2種類の花穂を軽やかに籠にいけ、ここでは雄大なパンパステラスの花穂をたっぷり厚めにいけた。

ローゼルの赤い蕾で花穂の白色が際立つ。ただ、どちらにも緑がない。悩んだ末に大輪のアナベルを加えた。四角い器で丸いアナベルを浮き上がらせた。



韓藍の花

△3頁の花▽ 仙溪

鶏頭（莧科）



われもこう
吾亦紅（薔薇科）

煤竹籠

韓の国から来た藍染めの花なので韓藍（からあい）と呼ばれたと覚えていたが、藍色に染まるわけではなく、藍の葉を衣に折りつけた（折り染め）色と似た色が鶏頭の葉でもつけられたのが由来だそう。色は葉の緑色。衣に草花の色を折りつけるのは神聖な気を帯びるためだろうか。



帰宅を待ってたみたいに部屋へ来てくつろぐニャンズ。





七竈 直真立花 仙溪

七竈 (舊薇科)

鹿の子百合 (百合科)

龍胆 (龍胆科)

檜扇 (菖蒲科)

手毬下野 (舊薇科)

小菊 (菊科)

小海老草 (狐の孫科)

陶花瓶

今では珍しくなってしまうた

カノコユリが売られていたの

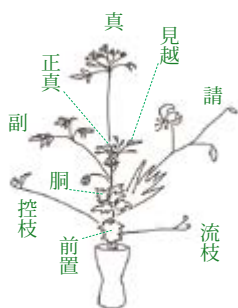
で、立花の請に使った。貴婦人

のような美しさがある。ヒオウ

ギを添えると景色になった。写

真では胴が弱く見える。数日後、

胴を赤いケイトウに替えて良くな





檜葉の生花

健一郎

檜葉（檜科）
ひば（ひのき）

銅花瓶

ヒバの香りに包まれながら
いた生花。花屋で見つけたとき
は、お盆のために集められた花
材に見えていたが、これを生花
にすると、一本一本のその枝の
良さが引き出され、魅力的に見
える。本当によく考えられた、
自然から生じた型であり、いけ
ばなの力である。

饗養文の強く重たい印象に合
わせ、胴のあたりの葉は軽く整
理する程度にし、葉の力強さを
意識した。同じ種類の花材を生
花で生けたとしても、器によつ
て敷板の有無や、周りの空間に
よって花形だけでなく、残す枝
や捌く枝も大きく変わる。





杉玉とダリア

仙溪

ダリア2種（菊科）

レモンリーフ（躑躅科）

杉玉

陶花器（崔龍熙作）

写真の茶色い球は杉玉で、酒の神様に無事に美味しいお酒ができることを願って酒蔵の軒先に吊される。酒林（さかばやし）とも呼ぶ。杉は酒造りに欠かせない神聖な木なのだ。はじめ緑色の玉が一年たつと焦げ茶色になり、また新たに作り替えられる。

陽数（奇数）が二つ重なる九月九日重陽節。旧暦では菊の季節なので菊にまつわる習わしが今に伝わる。沖縄では菊の葉を三枚入れた器に泡盛（あわもり）を注いで神様ご先祖様に供え、そのあと集まった人達でいただくのだそうだ。

戴いた杉玉にダリアが似合うと思っただけだが、見てみると美味しい日本酒に菊の花弁を浮かべて飲みたくなってきた。食用菊で菊酒と洒落（しやれ）てみるかな。





散歩道の楽しみ

△表紙の花▽ 櫻子

西播蜀黍 他 (稲科)

青薄 (稲科)

広葉杉 (檜科)

菊「チスパ」(菊科)

宗全籠

数種の稲科植物を混ぜいけ、コウヨウザンの枯れ枝を加えたところに、個性的なキク「チスパ」が命の輝きを強めてくれた。コウヨウザンは散歩道で拾ったもので飴色の光沢が美しい。枯れ色で季節感が深まった。



①

桑原健一郎華道教室

いけばな展 「余韻」

会期 10月25日(金)公開いけこみ

26日(土) 9時～17時

27日(日) 9時～15時

会場 鹿王院

昨年、軒号の引用元と思われる杭州の富春山へ散歩し、花をいけたり、その場で郷土料理と共にゆつくりと時間を過ごしていました。江戸時代に、流祖が目指した気韻生動な在り方やいけばなは、中国文化に對しての尊敬の念があったと想像しています。富春江を歩いたり、その場にいる人たちの交流で感じました。そして内省的になり、自分が育った風土と比較し、自身に強く影響していることを認識しました。

中国では、響きを聴覚で感じ取り、内なる生命の脈動が伝わるものを優れたものとし、日本では響きを「にほひ」から感じ取り、生命の艶や色気を感じ取れものを魅力に思うそうです。

今まで漠然と、生き生きとしたいけばなを模索していましたが、振り返ってみると中国的な生命の純粹さや、気品の高さを目指していたようです。

近頃は、それらを意識しながら、薫る生命の色や、つやに興味が出てきました。

お弟子さん達と共に、それぞれの道を意識し、稽古を共にしてまいりました。まだまだではございますが、それぞれが醸す色気、すなわち生命の勢いを、皆様の感覚で楽しんでいただけたら嬉しく思います。

鹿王院の空間、そしていけばなの響きから生まれる余韻を、感じ取りに是非いらしてください。

健一郎

菊之一色

花伝書を見る

立花 菊一色

「菊の一色（真：初版）」

桑原次郎兵衛

菊 小菊

（立花時勢粧・下 秘曲の図）



桑原次郎兵衛



△ 8 頁の立花図▽

ひよろりと立ち昇る真を頂点にして、徐々に個性を色濃くしながら四方へ広がる菊たち。個々のリズムが美しく纏め上げられている。

「秘曲の図」は40図あり、うち富春軒24図、次郎兵衛9図で殆どがこの2人の作である。

菊 3 種と赤い実 仙溪

藪山査子（雪の下科）

菊「セイフエスト」（菊科）

糸菊 スプレー菊（菊科）

木苺の紅葉（薔薇科）

陶花瓶

昨年11月4日の稽古花を3日後に撮影。固かった糸菊の花弁が伸び広がり神々しくさえ感じる。そんな菊の季節がもうすぐやってくる。





『玩菊図』明 陳洪綬 台湾国立故宮博物院所蔵

出典：台湾国立故宮博物院アーカイブサイト

陳洪綬（1598～1652）は明末清初の文人画家。独特の画風は後世に影響を与えた。6月号の『仙人献寿図』も彼の作。

中国の挿花

⑩

仙溪

9月に因んで菊の挿花を。

明代末の『玩菊図』には、岩の上に置かれた花瓶に黄葉した柿の枝と白菊が挿されている。それと向かい合う人物は長い杖を持ち、奇妙な形をした自然木の椅子に座っている。（図①）

台湾故宮博物院の解説ではこの人物のことを「高士」と表現している。調べると、志が高く立派な人格を備えた人物、人格高潔な人、世俗を離れて生活している高潔な人物、隠君子、のことである。流祖、富春軒仙溪が思慕したであろう後漢初期（1世紀）の隱者・

嚴光（厳子陵）のような人のことだ。解説には「菊を愛した陶淵明（365～427）を彷彿とさせる」ともある。

陶淵明も職を辞して故郷に戻り、自ら農作業に従事しつつ生活に即した詩文を多く残した人物である。

この絵をじっと見ていると、自分が絵の中の人物と入れ替わって花と対話しているような気分になる。自分がいた花から何かを教えてもらっているような感じがした。

「菊は隱遁と君子の高尚な品格を象徴し、絵の中の人物は単に花を愛でているだけではなく、自然に近づくことの追求を反映して、物と自己との一体

③



『画院画十二月月令図・九月』（図④）の部分。 籬（まがき）に菊の植え込みが並び、主に女性と子供が楽しんでいる（図②）。船に菊鉢と酒壺を積んでやってきた人とそれを出迎える人（図③）。重陽節に自慢の菊を持ちよって菊酒を飲み詩を詠む。



『画院画十二月月令图・九月』清 台湾国立故宫博物院所蔵 出典：台湾国立故宫博物院アーカイブサイト

清朝皇帝の離宮・円明園を舞台に十二ヶ月それぞれの行事や生活の様子が描かれた十二幅の軸の1つ。円明園は1709年に庭園ができた後、様々な建物が増築され、噴水や西洋楼も建てられたが、1856年第二次アヘン戦争以後、他国による略奪と破壊、さらに文化大革命をへて荒廃した。現在は重点保護文化財の指定をうけて修復を進めつつ、多くの観光客が訪れている。

性の境地にまで昇華します。」と解説にある。中国文人の心の有り様を深く表現した文章だと思う。挿花図を探すうちに、華道の深奥に通じる言葉に出会うことができた。

清代前期の『画院画十二月月令图・

九月』には重陽節に菊を愛でる様子が壮大に描かれている。(図②③④)

北京北西の離宮、円明園を舞台に十二ヶ月それぞれの行事や生活の様子が描かれた十二幅の軸の1つだ。

九月九日、重陽節。災厄を避ける目的で菊酒、茱萸、登高(登山)という

風習が漢代から始まり、唐宋の頃には文人雅士の飲酒、賞菊、登高、賦詩を行う節日となった。

絵には菊の植え込み(図②)や鉢植(図③)が描かれている。船で菊の鉢を運ぶ様子や、今まさに菊会に船で到着した場面も。船には酒壺も積まれて

いる。挨拶を交わす人。楽しい会話が続いてきそう。

菊を愛でて酒を酌み交わし詩作する人たち。画面奥の裏山ではピクニックを楽しんでいる人もいる。

日本の江戸時代中期頃か。隣国の花事情が緻密な絵から想像できる。

葡萄の季節

健一郎

ななかまじ

七竈（薔薇科）

葡萄（葡萄科）

斑入り野葡萄（葡萄科）

カンツイ（角杯）

今年の三月にスイスの自然を訪ね、その土地の花を生け、その土地の人と関わり、没頭するように味わった。そしてスイス固有品種のワインを飲んだ時のことが忘れられない。「ああ、これがスイスか。」土地そのものであった。それ以来、今まで訪れた国をはじめ、様々な国のワインを日々楽しんでる。

涙を浮かべるようなものや、自分と似ているようなもの、エスニックなものやいけ好かない物まで含めて、様々なものに出会った。美術との出会いに近い心の動かされ方をするのは、人の手が介在しているからであろうか。いけばなに近いものを強く感じる。

この器は家元副家元と行ったワイン発祥の地、ジョージアの古物市で手に入れたカンツイと呼ばれる酒杯。動物の角でできている。友情や団結を示すために大切なもので、乾杯が特に重要な瞬間らしい。まもなく収穫を思わせる季節の花になった。



いけばな

桑原専慶流

テキスト

2024 年

10 月号

No. 736

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





中国の「清供」が 日本の華道に影響？

仙溪

中国の插花文化に興味を持つてから、「清供」という言葉を知り、どのような概念なのか知リたかったので Chat GPT に質問してみた。ざっくり言うと、清らかで高尚なものを身の回りに置くことだそう。

そもそも文人や士大夫が精神的豊かさを求めて、自然や芸術を感じさせるものを自分に対して供える行為やその物を言う。

文人が「清供」という言葉を使い始めたのは明代（1368～1644）以降らしい。ひよっとすると、この概念が日本の供花を仏壇から生活の場へ移動させたのではないだろうか。

自分に供えるというのが日本人には分かりづらいけれど、中国ではしつくりくる表現なのだろう。插花も清供の一つとして文人に愛された。

私達が花をいけて部屋に飾るのも、まさに清供の文化と云っていいと思う。花をいけることは自然との調和を追求していることでもある。そこには精神的な豊かさがある。



山茶花の生花

△2頁の花▽ 仙溪

山茶花 (椿科)

銅花器

今年1月にいけた写真だが、サザンカの季節を前にして掲載する。あまり撓めずにいけたので、長く花を楽しめた。



横枝を立てて葉を見せる

△3頁の花▽ 仙溪

更紗灯台 (躑躅科)

菊2種 (菊科)

飴色釉陶花器

サラサドウダンの横枝を立てていけた。葉色を楽しむ特殊ないけ方。



八角蓮の実

健一郎

晒菜升麻(金鳳花科)
さらしなしょうま きんぽうけ

八角蓮(目木科)
はつかくれん めぎ

吾亦紅(薔薇科)
われもこう ばら

野紺菊(菊科)
のこんぎく きく

船形辰砂釉花器(宇野仁松作)

八角蓮のほんのり色づいた葉と実を見つけ、感じた自分の気持ちを表そうと試みた。初夏に比べて、野の植物と合わせても良く見えそうであつたので、吾亦紅と野菊を取り合わせた。サラシナショウマと器の品格とが相まって、いい景色になっている。盛花でしか出せない景色になった。八角蓮の茎が弱っており、剣山のみで形が定まらず、枝に引っ掛ける形で生けている。深山の八角蓮、山地のサラシナショウマ、里の吾亦紅と野紺菊。秋のご馳走である。良い花と出逢えた。



秋草立花

健一郎

雁金草（紫蘇科） 真
 着せ綿（紫蘇科） 見越
 山程（茄子科） 正真
 秋明菊（金鳳花科） 内副
 水引草（蓼科） 請
 竜胆（竜胆科） 流枝
 菊（菊科） 葉のみ 控枝
 杜鵑草（百合科） 胴ほか
 桔梗（桔梗科） 前置
 女郎花（女郎花科） あしらい
 萩（豆科） あしらい

刷毛目花器（崔龍熙作）

虫から見た目線で植物と触れ合ったりする時間があるのだが、終介と方々に行くようになると、その時間がより濃密になった。いい遊び相手である。お花屋さんで季節の花を選んて、自分の感じたものを表し出しやすかったのが立花であった。



出逢い花

仙溪

紫式部むすめ部ぶ（熊葛科）
秋明菊しゅうめいぎく（金鳳花科）

刷毛目扁壺（八木一夫作）

切り枝でムラサキシキブと呼ばれているのは、その殆どがコムラサキで、紫色の実の付き方に間隔が開くのがムラサキシキブ、作例のように連続して付くのがコムラサキ。

そうと知っていても源氏物語の作者名で呼びたくなる。ちなみに漢名は紫珠だそう。

「雲ヶ畑・足谷人と自然の会」で山歩きをした時、沢沿いの道端に大きなムラサキシキブが生えていた。根元はかなりの太さがあったが、材は硬く、古くは極上の堅炭かたすみになったそう。

石化（帯化）したムラサキシキブは珍しい。シュウメイギクを添わせ、満月のような器にいた。久しぶりの出逢い花。





ミモザ・ブルーブッシュ

櫻子

ミモザ・ブルーブッシュ

(豆科)

ピンクッション

(ヤマモガシ科)

ダイヤモンドリリー

(彼岸花科)

トルコブルー陶花器

ミモザ（アカシア）・ブルーブッシュはオーストラリア原産で、春に黄色の花が咲く。

相手に選んだ花は2つとも南アフリカ原産なので、南半球の植物同士、ミモザとも相性が良さそうだ。

ダイヤモンドリリーはネリネの一種で、花卉の表面がキラキラと輝くのでこの名がついた。ピンクッションは裁縫で使う針山からの命名。

このミモザは初めていけたが猫の尻尾のようで優しい雰囲気。今後が楽しみな花材だ。



同行之花形 内副立

花伝書を見る

立花 松除真

「除真行の花形内副立」

中野小左衛門

松

菊

小菊

梅擬

晒木

粗檜

嫩葉

沢枯梗

(立花時勢粧・上)

門人の名があるが富春軒を強く感じる。一度下がった真の幹に対して、副も請も上る姿で対応。右に下がる梅擬と晒木は控枝だろう。自由な発想と絶妙なバランス感覚。



中野小左衛門

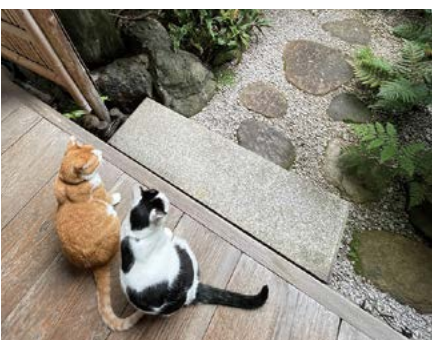
チャットジーピーティー

仙溪

以前紹介したインドやエジプトもそうだったが、台湾の故宮博物院が所蔵品をデジタル公開しているお陰で、居ながらにして過去の芸術を鑑賞することができるのは大変有り難いことだ。さらにそこに書かれた説明文を頼りに調べていると、異国の文化への理解も進む。

今回はじめて Chat GPT を使うことで、中国の「清供」という概念を理解することができた。おそらく中国のサイトからの知識に依るのだろう。

異国の文化を理解するためのツールとして活用されるといいなと思う。



葉つきの山帰来

△表紙の花▽ 櫻子

山帰来さんきらい（百合科）
鶏頭けいとう3種（莧科）

布目陶花瓶（伊藤典哲作）

正式な名前はサルトリイバラだが、サンキライの方が呼び慣れている。若葉で包んだ山帰来餅のことが頭にあるからかもしれない。元来食いしん坊なのだ。晩秋の赤い実の頃もいいが、初秋の黄色い実と青い葉の頃にいけるのも好きだ。光沢のある葉と丸く集まった実。見ている



だけで山の自然に抱かれた気持ちになれる。

立派な枝だったので安定のある器を選び、別の太い幹にのせていけている。秋色のケイトウで、下がる実に立つ花を対比させた。





『曹大家授書図 軸』清 金廷標 台湾国立故宮博物院所蔵 出典：台湾国立故宮博物院アーカイブサイト

金廷標（？～1767）は清代の画家。中国南部、浙江省湖州の人で、乾隆帝が南巡した折に才能を認められ宮廷画家となった。満州人の乾隆帝が、漢民族の故事や伝統文化を大切に絵に描かせたのには、どんな意味があったのだろう。書を授けろとする子どもの頭髪の結わえ方が他の子たちと違うのは何故だろう。

中国の挿花 ⑪

仙溪

今回紹介する二つの絵には多くの幼子が描かれている。中国絵画にはしばしば目出度い意味をもった植物や動物、器物とともに幼子が微笑ましい仕草で描かれる。幼子も目出度い宝だというメッセージが感じられて、見ていて心が和む。

小さな子どもが遊ぶ絵は『戲嬰図』『嬰戯図』と題されているので検索してみてもほしい。遊びや季節の行事の様子が描かれ、伝統的な生活文化を目で見ることが出来る。

『曹大家授書図』には6人の子どもが描かれ、そのうち年長2人が字を書く女性に対して畏まっている。

「班昭援筆授書」という故事に依ると故宮博物院の説明にあった。班昭という女性が筆をとり書を授ける場面。

班昭は後漢（25～200年）前期の著作家で、父も兄も歴史家であり、兄の班固が遺した未完の『漢書』を書き継いで完成させた。若くしてその才を認められ、宮中で後宮后妃に教える師範となり「曹大家」と呼ばれた人物である。（曹は早世した夫の姓）

絵の場面は清の時代に置き換えられているようだ。宮中の一室だろう。庭に白梅が咲き、南天の実が赤い。優雅な脚の高卓には寒牡丹の鉢。白磁の盤



『戲嬰圖 軸』清 金廷標 台湾国立故宮博物院所蔵 出典：台湾国立故宮博物院アーカイブサイト 子どもの頭を見ると幾つかの違いがある。大人の髪形から推測すると清の時代を描いた絵だろう。他民族融和の願いがこめられているのではないだろうか。

に寿石と水仙で作られた盆景。竹籠に松や椿が盛られ、その横に火盆が見える。季節は冬だ。満月門の向こうで梅の木に吊るした爆竹に火をつけようとしている子どもがいる。中国の正月、春節を迎える準備の情景らしい。このあと「福」と書かれた赤い紙を戸口や部屋に貼って新年を迎えるのだろう。

『戲嬰図』には11人の子どもが描かれているが、楽器を持って演奏し、竹馬に跨がり勝負する様子からは、新年を迎えて楽しく遊ぶ賑やかで幸せな雰囲気伝わってくる。

庭の木々や建物のつくりが『曹大家授書図』と似ている。おそらくこれら二つの軸は新春前後の宮中を描いた対の絵ではないだろうか。年末の厳肅な緊張感と、新年を迎えた慶びと、その両方が鮮明に感じられる。

さて、どちらの絵にも挿花が描かれている。

先の絵では壁に貼られた絵の中。白瓷の花瓶に臘梅、椿、万年青の葉がいけられて、水仙と寿石の盆景、靈芝、柿の実が添えられている。

後の絵では机上の細首花瓶に紅梅、南天、松、椿がいけられ、同じく水仙と寿石の盆景が添えられている。

解説によれば、前者を瓶供図とし、

後者を「梅瓶に南天等が供えられている」と説明している。お供えであれば仏壇や祭壇を連想するが、調べてみると中国には「清供」という文化が古くからあって自分への供え物のようだ。

【清供】とは

中国の特に文人や士大夫階級の間で愛されてきた重要な概念で、精神的な豊かさを追求するために、日常の生活において清らかで高尚なものを（自分に）供える（身近に置く）行為やその物をさす。

供物は自然や芸術を感じさせる花、石、香木、盆栽、陶磁器などで、書や画、詩の創作およびその鑑賞も含まれる。

〈Chat GPT〉

暮らしの中で高尚なるものを身近に置いて精神の充足を願う、その一つに挿花があった。植物や物がそれぞれ象徴する意味に、豊かな暮らしへの願いを託していた。そうと知って中国の絵を見ると、理解が深まる気がする。

二つの絵は大昔の故事を清の時代背景で描き、掛け軸にして飾ることで、教育と伝統文化の大切さを伝えつつ、絵自体が清供としての役割を果たしたのだろう。中国人が花をいけ、絵に描いて飾った気持ちに、一歩近づけた気がする。



サラサドウダンの生花

更紗灯台（躑躅科）
さいらさとうたん

三彩釉陶大鉢（清水保孝作）

花屋ではドウダンツツジと聞いたが、大きな葉からしてサラサドウダンだと思う。紅葉しはじめた葉色と太い幹に一目ぼれして生花にいった。

普通サイズに収められず、かなり大型になったので、器も大きな鉢を選んだ。大きな蛇の目でいけている。厚みはないが存在感の強い生花になった。たっぷりの水と太い幹が自然の景色を感じさせる。

生花の真はやや前方へ出ながら弧を描き、梢が器の真上にもどるのが理想の形だ。そうすることで自ずと立体的な躍動感が生まれる。

サラサドウダンは日に日に葉色が変わっていった。目の保養。至福のご褒美である。



いけばな
桑原専慶流

テキスト

2024 年
11 月号
No. 737

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元



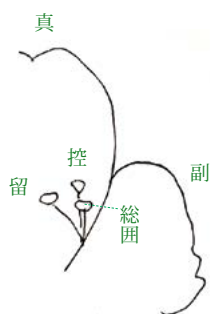


ツルウメモドキ 仙溪
蔓梅擬(錦木科)
菊(菊科)
陶花瓶

ツルウメモドキの実が黄色くなり、殻が弾けると艶やかな赤色から橙色もしくは黄色の実が顔をだす。秋の深まりを感じる。

ツルウメモドキの生花には、蔓を支えるものが要る。そんな時のために捨てずにストックしておいた真つ直ぐな枝を支えにして、なおかつ真と副を絡ませていけている。自然なカーブに心も弾む。

留側には菊が似合う。無理に撓めると折れてしまうので、茎に針金を入れて撓めた。その方が長い間元気でいてくれる。





糸菊と丁子草の生花 ちようじそう

仙溪

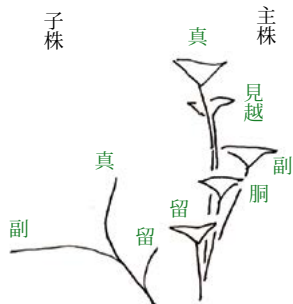
主株 糸菊2種 (菊科)

子株 丁子草 (夾竹桃科)

陶水盤

菊の生花は中輪菊までが良いと教わったが、いけ方によつては、秋の大輪菊も生花で楽しめる。バランスを考慮して控を入れずに見越を加えた。花持ちを優先して、留のほかは撓めずにいけている。

主株は立ち姿に。子株で横への動きを。チヨウジソウの黄葉で季節感が深まった。





鮮やかな葉と花

△4頁の花▽ 櫻子

木苺 (薔薇科)

高砂百合の実 (百合科)

菊「笑の舞」 (菊科)

陶花器 (アメリカ製)

この見事な大輪菊は「笑の舞」という。濃赤色の花色が、色付いたキイチゴの艶やかな葉とよく合っている。タカサゴユリの実で季節感を深めた。花器の一部とキイチゴの葉色が繋がってくれた。



日本の風土に馴染んで

△5頁の花▽ 櫻子

赤紫蘇 (紫蘇科)

千日紅 (苺科)

女郎花 (女郎花科)

木通籠

和製ハーブのシソは中国やヒマラヤの原産だが、縄文時代に



白花の萩とレモンちゃん。
はぎ



はすでに日本に来ていたそう
だ。栄養価が高く、薬効性に富
む。料理の薬味に使う大葉はア
オジソの葉。しば漬は夏野菜と
アカジソの漬物というふう
に、食卓に馴染みが深い。
アカジソの花が花屋に売られ
ていたの、オミナエシ、セン
ニチコウを取り合わせてアケビ
で編んだ買い物籠にいった。



大切な菊

健一郎

伊勢菊（菊科）

嵯峨菊（菊科）

野菊（菊科）

擬宝珠（百合科）

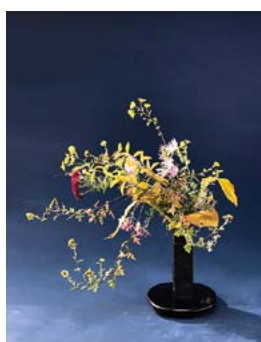
花器（ローゼンタール）

縁あって菊をこよなく愛する方のお宅へ。愛情から現れ出る、お花への、触れ方、その気持ちに刺激を強く受けた。今でも忘れられない日である。

大切な菊の一生についてのお話を聞きながら、共に一本、一本、選んで切っていく。

育てた方の目の前で切るの、その方と、菊の間に割り入る気持ちがいよいよ一層強くなり、申し訳ない気持ちになった。

近くに生えていた擬宝珠の葉が綺麗だったので添えていた。





秋惜しむ

健一郎

草牡丹（金鳳花科）
秋桜（菊科）

ガラス花器（スウェーデン）

結婚を機に、現在スウェーデンで住まうお弟子さんからの土産で頂いた。日常的だが、洗練されていて良いものである。ヴァイキングの時代からスウェーデンでは、「ちようどいい」という意味でラーゴンという概念があるらしい。日本語にはないニュアンスで、自分のこだわりを大切に、無理なく生活するという意味らしい。

北欧の寒く暗い季節の長さと、それを取り巻く環境がもたらしたものでろうか。

スウェーデンで生活をしていれば、春は待ち遠しく、秋がより名残惜しいものになるであろう。

ちようどいいでは我慢ならず、欲張りな僕はとびきり秋の出逢いを楽しんだ。



同

花伝書を見る

立花 すすきのきしん
薄除真

「除真行の花形の内左流枝」
むだりながし

林昌

薄菊 うめもとき
松 梅擬

熊笹 かたぎ
柘植 堅木

小菊 なつはげ
夏櫨 蒼我

(立花時勢粧・上)



ススキを大きく真にし
て、山の木々で下方の景
色を作っている。

山頂で風に波打つスス
キの群生をイメージして
立てたものか。

「山頭有草体」という立
て方がある。実際に山で
見た景色を元に立ててい
るのだと思う。

林昌

桑原専慶流師範会
立花研修会

会期 10月20日(日)
会場 六角会館(京都)
講師 桑原仙溪
参加 24名

【立花の役枝について】

真(心)は一番高く立つ。除真は梢を正真の上に戻すのが常で、戻さない時もある。

正真(正心)は直真立では真の前に立て、心隠とも呼ぶ。除真立では中心に直立する。

副は高く真に添い上り、真に勢いを持たせる役目。

請は真の勢いを受け持つ役目。副とは対照的につくる。

見越は遠くの高木を眺める心で。前置との釣り合い、正真との映りを考えて作る。除真の見越は左右高下を自由に作ってよい。

流枝は水際低く横へ(長く)流れるように。瓶の後ろ隅より出し、前置より前へ出ない。

前置は花形の要、草木の根締め。水際の正面に長く出すのが真の前置。行、草の前

置もある。

胴は瓶上の景所。縦横左右前後の大枝を育てる所。

控枝は副の下。他との釣り合い。無しも可。

腰は流枝、控枝の後ろ。真との釣り合い。

水際は夏高く、冬低く。

かこいで見苦しい所を囲い、景色も作る。

谷洞谷は胴の後ろ、正真の前。洞は流枝と前置の間。

つやは外より添え、内より頼らせて立てて、強々しいものを柔らかに見せる。

あしらいは役枝に足りない要素を補う役目。

晩秋の立花

△表紙の花△ 仙溪

ヒペリカム(弟切草科)

野茨(薔薇科) 鶏頭(莧科)

老鴉柿・老翁柿(柿の木科)

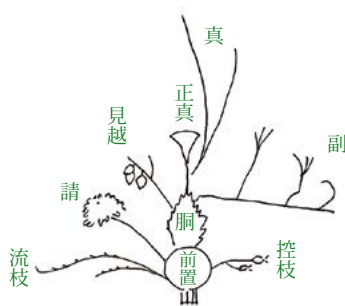
菊「かがり弁」(菊科)

赤芽柳(柳科) 小菊(菊科)

梔子(茜科) 姫桧杉(檜科)

陶コンポート

上半分の赤色濃淡、下段の黄色、中段の白色が、互いに引き立てあっている。ロウヤガキとクチナシの実、かがり弁の菊と秋色のケイトウ。いい花材に恵まれた。(昨年11月27日撮影)



枇杷、木蓴、竜胆、小真弓、梅、小菊。

中国の挿花^{そうか} ⑫

仙溪

6種の花器それぞれに、晩秋の花卉が素朴に挿されている。どの挿花も花卉の種類は1種あるいは2種で挿し方も自然体だ。

右上はハゲイトウ、オモト。ハゲイトウは熱帯アジア原産だが、中国には宋時代に伝来。雁来紅^{がんらいこう}とも呼ばれる。

オモトは日本と中国原産。

左上は中央に赤みのさす白色中輪キク。

右中はチャノキの花だろうか。チャノキは中国西南部原産。開花は秋。

真ん中はスルガランだろう。中国南部原産で夏から秋に咲き、とても良い香りがする。

右下は2種の小輪キク。

左下は2種のアスターか。アスターは中国北部原産。

花器の素材、形、焼き方、絵付けも様々。花台も4種それぞれ違う。さりげなく如意が置かれて吉祥画の体裁をとっているが、主役は花たちだ。

さて、この軸は織物である。中国では緯絲（こくし）と呼ばれる綴織^{つづれおり}だ。宋時代以降、花鳥画や山水画を多彩な

糸で緻密に織り上げたものが宮廷に飾られた。中国南部の蘇州^{そしゅう}が緯絲の中心地だったそうだ。

過去の記録的な意味を込めて乾隆帝がつくらせた挿花の軸のように感じる。縁起の良い花や器物の絵が主流の時代に、素朴に花を器に挿す行為の清らかさを伝え残したかったのでは、などと想像をふくらませている。



おぶせ
小布施

高井鴻山と北斎

仙溪

10月初旬、栗の季節に「朱雀」という名の新栗の菓子を食べた

くて、北信濃の小布施を訪れた。栗を食べたら北斎館へ。小布施は葛飾北斎（1760～1849）が晩年（83～89歳）に長期滞在して、寺院や祭屋台の天井絵を制作するなど多くの肉筆画を描いた所。それには北斎を江戸から小布施へ招いた人物がいた。

小布施の豪農・高井家当主、高井鴻山（1806～1883）は15歳から16年にわたり京都や江戸へ遊学し、各界の第一人者か

ら学問や芸術を修めた。家業を継いでからは日本の行く末を憂い、幕末の変革に関わり、維新後は東京や長野に私塾を開いて教育活動に専念した。

その高井鴻山が小布施を文化の香り高い地にするべく、絵の師匠と敬服していた北斎を4度も小布施へ招いている。

高井家は過去の飢饉の際には代々築いてきた巨万の財を惜しみなく困窮者の救済に当てている。そんな家風が鴻山を社会に深く関わらせたのだろう。

北斎も鴻山の情熱に応えようとした。二人の熱い交流が今の小布施に息づいているように感じた。



『鶏頭』北斎 北斎館蔵

企画展「北斎の植物図鑑」より。
北斎は様々な植物を小布施で描いている。



天井絵を見上げた時に見える並び方。

『上町祭屋台天井絵 怒濤図』北斎

上：男浪 下：女浪 北斎館管理

神輿屋台の天井絵。周囲の縁絵は北斎の下絵を基に鴻山が彩色した。怒濤図の下には「水滸伝」に登場する勇ましい皇孫勝（公孫勝）が龍を呼び出す像がある。この像も北斎プロデュース。



左『菊図』北斎（八十八歳） 右『菊図』高井鴻山 北斎館蔵

北斎と高井鴻山、それぞれの菊花の軸が並んで展示されていた。鴻山は書も絵も才があり、それらは小布施の高井鴻山記念館で見られる。



ピラミッドアジサイ

仙溪

ピラミッド紫陽花（紫陽花科）
薔薇（薔薇科）

陶コンポート

ピラミッドのような花序^{かじよ}なのでピラミッドアジサイと呼んでいる。また、アジサイよりも遅れて7月頃、旧暦の6月（水無月）に咲くのでミナヅキとも呼ばれる。

この花はノリウツギ（糊空木）の園芸品種で、もとのノリウツギは樹皮から糊^{のり}を採り和紙の製造に利用されてきたが、切り花や庭園の植栽ではあまり見かけない。大台ヶ原にノリウツギの自生地があるそうだが、秋色に染まった花を見てみたいものである。

大きなピラミッドアジサイは高価だが存在感は強い。葉の美しいバラを選んで、すっきりと2種でいけた。



いけばな
桑原専慶流

テキスト

2024 年
12 月号
No. 738

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





冬の先に

仙溪

今年3月に華老の横田慶重先生が亡くなられた。師範会会長としていつも明るく元気に流派を引っ張って下さった。海外遠征でも現地の食事をもりもり食べ、ハードな毎日をこなしておられた。お寺に嫁いであらずと家のことを切り盛りながら、茶道と華道を極めてこられた凄い人。いけられる花はダイナミック。秋につくられる栗の渋皮煮は格別の味だった。先生が亡くなられたのは大きな悲しみだけど、家元となつて20年間ずっと支えてくださったことに感謝の気持ちでいっぱいだ。

「冬来りなば春遠からじ」育てられたお弟子さん達がそれぞれの道を歩いていかれるのを天国から応援してあげて下さいね。

晩秋の色

仙溪

ブルーベリー（躑躅科）

水仙（彼岸花科）

嵯峨菊（菊科）

陶花瓶

ここ数年でブルーベリーの紅葉も花材として定着してきた。



赤・白・緑

仙溪

ひいらぎもちのき
柊（繡の木科）

てつぽうゆり
鉄砲百合（百合科）

つづじ
レモンリーフ（躑躅科）

陶花瓶

クリスマスを意識して花も器も赤白緑で取り合わせた。白いユリは聖母マリアの象徴でもある。レモンリーフの緑が優しい。



他にもキイチゴやヒペリカムなど、秋色の枝ものに新たな仲間が加わってきた。
出始めのスイセンと。晩秋、初冬の投入花、



万年青の生花

十五葉二果

仙溪

万年青（百合科）

陶水盤

万年青は常緑の葉と赤い実に「長寿」「繁栄」を託して大切にされてきた。徳川家康が最初に江戸城に入るとき万年青を床の間に飾ったとあるように、大変縁起の良い植物だ。

立花時勢粧には「藜蘆」「老母草」の字が使われ「葉組しまりたるは幽玄ならず、ゆるやかなる時はくだけて勢いなし」とし出生玄妙な姿を良しとしている。「半（奇数）に使うのが常だが、調（丁、偶数）に使ってもよい」とある。現在の生花において、流派によつては葉数を偶数にするところも多い。これは万年青の葉が対で出ることによるが、当流は葉数を奇数にしている。

万年青は5、6月の梅雨の頃に花を咲かせ、夏に緑色の実がみえる。気温の変化で実は赤く色づいて行くが、横から伸び出た葉によつて実は隠されていく。あたかも親（葉）が子（実）を寒風から守っているかのよう。

万年青をいけるときは、葉が実を守り育てているようにいけたい。

万年青生花

十五葉二果

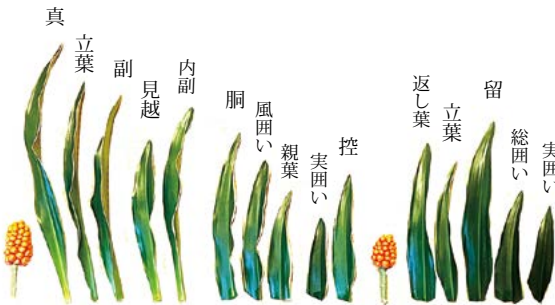
それぞれの長さやいけ方は葉の姿に合わせて工夫する。



横から見たところ



上から見たところ



印象的な赤

〈表紙の花〉 櫻子

車輪梅 (薔薇科)

ブルーアイス (檜科)

アンズリウム (里芋科)

ボヘミアンガラス花器

シャリンバイは艶やかな厚みのある葉が枝先に輪のように並ぶ。身近によく見かけるのだが、トベラやモッコクともよく似ているので紛らわしい。

この枝は実がブルーベリーに似ているのでシャリンバイだ。バラ科シャリンバイ属。東アジアに自生する常緑低木。実に毒性は無い。



いが食べる部分が殆ど無い。いけるのは初めてで。地味だが温かみがある。凍てつく中で輝いているような不思議な魅力があるブルーアイスを合わせて、強烈な赤色を感じるアンズリウムを覗かせた。同色のガラス花器で幻想的な景色になった。これからの季節に赤色は欠かせない。

花伝書を見る

〈6頁の図〉

立花 梅擬除真

富春軒

梅擬 松 柘植 椿

菊2種 小菊 熊笹 枇杷

(立花時勢粧・中)

菊薫る秋の立花。

「立花時勢粧・中・雑体の図」の最初を飾る富春軒の立花。

真と請の枝垂れたウメモドキによって花形の中に目に見えない球体を感じる。

左下水際から出た枯れ枝が、控枝の松と前後で重なり輪のように見えているが、この枯れ枝が花形の丸みを完成させているように思う。

花形に大小の円があり器の手も円形なので、見ているとしみじみとした「和」を感じる。自然が生んだ造形の調和。

花と器の調和。

空間と立花の調和。

それらの「和」が立花の醍醐味なのだ。

亥花時拵粧中雜物之圖



富春軒

(解説は5頁下)



躑躅除真立花

仙溪

躑躅2種(躑躅科)
 蔓梅擬(錦木科)
 黄金檜葉(檜科)
 木苺(薔薇科)
 竜胆2種(竜胆科)
 小菊2種(菊科)
 桔梗(桔梗科)
 杜鵑草(百合科)
 陶コンポート

立花研修会で立てて10日後に込藁ごと抜いて水を替え、傷んだ枝と花を挿し替えて撮影した。水を替えたり悪くなった部分を取り除き、新鮮な花材を加えることで、いけばなは長く楽しめる。



最初に立てた立花。



余韻

健一郎

立花

枝垂柳 しだれやなぎ 枇杷 びわ (斑入) ふいり 灯台躑躅 とうだんつづし 苔躑躅 こけつづし

竜胆 りんどう 撫子 なでしこ 小菊

場：鹿王院客殿 器：蝶耳銅立花瓶

「柳は緑、花は紅」数年前の自分と比べても、肩の力が少し抜けてきた。

お花屋さんが枝のよくしまった枝垂れ柳を用意してくれた。柳のみで生花にしようかと考えたが、次から次に生きたい花が目にとまり、立花になった。

昔は花街の事を花柳 かりゆう といった。色と関わりのある言葉に柳がよく出てくるのは、川沿いに柳が植えられていることも関係あるだろうが、柳の持つ艶がそうさせているのだろうか。柳はつい見てしまう植物の一つで、さまざまな季節の柳が記憶の中にある。夏に頬に触れるひんやりとした柳、何も考えずぼんやりと見つめているだけの柳。最近では、子供と走りながら、顔や身体に触れる柳を楽しんでいる。

艶や、色気について考えたり感じたりする事が多い一年だった。感じてきたものが自ずから現れ出た立花になった。

「神社の感じがしました。」「植物を信頼しているのが伝わりました。」という言葉が、自分の中に残っている。

内から現れ出ているものなのだろうか。好奇心に身を任せ、ただ在り続けたい。



高山の景色

健一郎

乱れ菊数種

曝木

苔躑躅

竜胆

大文字草

美男葛

米桐

堂本印象美術館野外いけばな展出品作

陶花器（竹内眞三郎作）

紅葉を楽しむ少し前の高山の植物が好きで、少なくとも、一年に一度は歩きにでかける。山では、春から秋にかけて忙しく季節が動く。岩と岩の隙間から顔を覗かせる竜胆や大文字草、そして雨風、日光に強く晒される事で曝木の景色が現れる。

今回のいけばな展のテーマ「秋の郷愁とモダニズム」にあわせて、もともと信仰心があつての山登りが、スポーツとしての山登りとして広まり、多くの人が高山の花を見る事ができるようになったという時代背景を意識して、その景色を表現した。

中国の挿花 ⑬

仙溪

中国では春節（旧暦の正月）に、幸福を招いて厄を除ける願いを込めて、家に飾っていた年画を貼り替える習慣があつて、今でも地方で行われている。年画は民間の木版画であり、

そのまま部屋や扉に貼って一年を過ごす。

もともと桃の木に彫った門神像を門にかける風習が漢代にあったのが、絵師による絵に変わり、やがて明時代（1368～1644）の版画技術の広まり

によつて庶民の間で木版年画が生まれ

たそうだ。年画には農民が農閑期に1人でつくる素朴なものから、絵師、彫り師、摺師が分業でつくる精緻な物まであり、題材も門神、財神、縁起の良い植物・

動物、芝居や物語の人物や場面、子ども

の道德教育など様々だ。

春生々々猶含雪香透
疎影自知 亮先氏題



『花卉博古图』丁亮先 清時代 18世紀中頃 紙本 木版 多色摺 空摺 海の見える杜美術館所蔵
37.5 × 30.1cm 出典：『蘇州版画の光芒 国際都市に華ひらいた民衆芸術』2023年特別展図録

『花卉博古图』は丁亮先という絵師が描いた吉祥画の木版刷りで、子宝を暗示するザクロや、特殊な能力を持つ芭蕉扇（軍配に似た道具）、花が咲き出る筆（李太白の夢に出てきた筆花）などとともに、白梅と赤椿の挿花が描かれている。梅は「好文木」とも呼ばれ、学問の象徴として知られている。手前の箱に

疎影横斜水清浅
暗香浮动月黄昏

（梅の）疎らかな枝は清い流れの水に斜めに影を映し、ほのかな香りが月の昇るたそがれ時にどこからともなく漂ってくる。

とあるのは、北宋の詩人・林逋の詩の有名な一節で、対で門柱に書かれることが多いそうだ。（一対の句は対聯と呼び、春節に赤い紙に書かれたものを門の両側に貼るのを春聯と呼ぶ）

かつての中国の一部かもしれないけれど、花を花瓶に挿した絵が、庶民の日々の暮らしを明るく照らしていた。高尚な挿花を絵に描いてまで身近に置こうとした中国人の、花に対する思いがどんなものなのか、もっと知りたくなってくる。



実と花の間

櫻子

山茱萸（水木科）
さんしゅうゆ みずぎ

雪柳（薔薇科）
ゆきやなぎ ばら

菊（菊科）

陶花瓶（幾左田昌宏作）

赤い実のサンシュユと薄紅色の立派なキク。ユキヤナギの紅葉が間を優しく繋いでくれた。濃紫色の花瓶で気品が増す。



⑥玄関で不動のレモン師匠。

⑤あっちこっち気になるメイ。

